



猿蓑法師

一





梅暮里谷我著

尤うた一夕話

歌川國貞画





東林菴樵柯注解七部集内

俳諧

猿蓑衣

東都書林 萬笈閣 梓

さきかき書名 注解了 序

此のさき風雅手おけ家造也牙

さきつひに四時成友と見たり

花ふりさきかきたまふも月

子あつたつとみなり かしら

牙つらさきかき秋ふ花に







口をさし入るを賢乃一言成心  
志愈々取成る所におきては  
路も見ぬ何事哉乃初志を遂る  
未情を操るを此の机り  
多かりしと後ふい路や石  
山なるを於持る木のや  
守子成扱て彼先を後人  
おのせし志抄と名つけさ  
骨子はそのおのせし  
るこし

樗栢の埒を然居士自序



蕉翁の俳諧はおけなやこの道の  
杜子美はけしき昔子の俳はまき白に取  
るさのらけ嵐雪をすははよむに  
一蓮丈草ハ淵明の風あり白は魂の今  
言外清あはれある五七五の文字  
に泥きく後人の解へるの味あ







くさくさ——御まみふらひ甚きもの氣  
操もその人の能くとも雲泥の違  
いあり強く解せんとせし返て能  
くさくさ——御まみふらひ甚きもの氣  
くさくさ——御まみふらひ甚きもの氣  
能くさくさ——御まみふらひ甚きもの氣

教んやん——御まみふらひ甚きもの氣  
毛己の命に敵を援萃するもの  
一教も全抄も旅手ものな——聞か  
くさくさ——御まみふらひ甚きもの氣  
とやひ——御まみふらひ甚きもの氣  
——御まみふらひ甚きもの氣



のまゝの藤公相の風をいふこと  
元禄の事情を探り猿蓑の抄  
をよみし初子の俳諧をいふこと  
やむと解まぬハ辭をいふこと  
する事ふいふこと 孟子は一言の豁然  
かゝる藤公相の所作の由をいふ  
実を源いふこと 藤公の俳諧に  
曰魂の入らぬこと 余情筆に  
かゝる又狂者の俳諧 勝方ふ  
余光一定のこと 二子試みの抄  
を楷梯のよみし藤公の筆を  
いふ猶抄のよみしを改む



是と清の序のしるしの流志也  
 是と清の序のしるしの流志也  
 是と清の序のしるしの流志也

猿蓑集百十五人

芭蕉公羽

姓平氏松尾字桃青伊賀國拓植郷赤坂の産  
 初名と宗茂と号一又宗房と云同國上野城代藤堂良  
 精嫡良忠と近仕す寛文六年秋二十三歳より仕  
 致一洛の北村季吟翁と遊学一歌連の溢泉と探り友  
 人北向雲竹の筆意を学ひ後一風と為る延宝六年江  
 戸より来り深川長慶寺佛頂和尚と參禪す後芭蕉菴桃  
 青と称し一風の俳諧に興立す元禄七年冬十月十二  
 日大阪の寓居ふして寂す時年五十一也江州粟津  
 義仲寺に葬る其角と終焉記に書す

其角

榎本氏江州膳所候の醫師堅田の産東順の子  
 一室晋齋と号す儒を服部平助受け醫に草刈三越と  
 一室晋齋と号す儒を服部平助受け醫に草刈三越と  
 一室晋齋と号す儒を服部平助受け醫に草刈三越と



学云書以佐玄龍小学以て後一家をとり畫以能友曉  
雲子一蝶小学以詩并易学以鎌倉大巖和尚小学以初  
名以螺舎と号し蕉翁の一の高足りて三百餘人の  
門人角々上り立りて性活連なりて言行亦小洒  
落也好酒李白り風韻をうりやむ世に放蕩と称る  
ハ誤也室永四年二月廿九日没行年四十七麻布二本  
榎上行寺  
小葬

### 嵐雪

服部氏淡州小榎並村の産なりて幼名以久馬助  
と云長りて東都に遊び新庄隱居候に仕へ又并  
上相州候に仕小彦兵衛と称し俳名を治助と云後嵐  
雪と改雪中庵と号り隱遁の後禪を学り宝永四年  
三月十三日五十七歳ふりて卒駒込  
常檢寺に葬り蕉門文学の一人也

### 去来

向井氏名義香俗称平次郎肥前長崎の産なりて  
彼地聖堂祭酒の氏族世々儒を業とり父向井玄

勝京師に至りて禁中の醫官となりて去来亦兄に随  
て京師に至り某の殿下に仕小兼り曆学小長し詩歌  
を玩ひ射術に妙を得たりと云は詩六し誄小武成  
業とすし書と落柿舎ハ嵯峨の別業乃号之室永元年  
甲申の秋九月十日卒東山真如寺に葬り中華蕉門乃  
高弟と称り此集の撰者也春秋五十三歳

### 丈艸

内藤氏尾州犬山長臣壮年武を辞して出家し江  
州松本の山上小隱り嘗て詩作を嗜む石川丈山  
の風操以慕りて自丈草と号り去来り詩に蕉翁子  
謂し夫は俳諧の学小其角嵐雪去来丈艸に蕉翁子  
門の四哲と称り後龍ヶ岡に閑關して生さるり三年常  
に法華經を讀誦す室永元年二月廿四日卒年四十四  
龍ヶ岡の佛  
幻庵と称り信州諏訪乃産也

### 允兆

加列の産醫を業とりて路に居蕉門頗る騷客也  
あゝの撰集に去来と共に名字未詳



乙州 フトクニ 江州大津に住す名字

千那 江州堅田本福寺住職妙式上人

不玉 出羽國坂田の人醫家業とす通称

曾良 河合惣五郎と称す祖翁元禄二年奥羽行脚に山

杉風 俗稱鯉屋藤左衛門と云東都官魚屋ふして小澤

嵐蘭 松倉氏甚右衛門と称す肥前島原古城主の裔也

千里 八月廿七日卒す谷中感應寺々中葬す

荷兮 尾刈名古屋の住檀木堂と

越人 姓越智尾刈名古屋

李由 江州平田遍照寺の住職亮隅上人と号當寺十四

路通 濃州の産大坂に住す

八十村氏

に日四十五歳

に寂す

に寂す

に寂す

に寂す



北枝 立花氏加列小松の産金澤に住立於牧童り弟也

露沾子 眞州岩城々主内藤左京亮義泰能名風虎又傍池亭因

蟬吟 日向村郡延岡城主其の裔也

探丸 蟬吟の弟也蟬吟世故早す

杜國 名字未詳三河國保美村の産子一蕉翁芳野行

曲水 江州膳所侯の長臣菅沼外記と称す曲水及後其

風麥 野の藩士也

土芳 服部氏平左衛門と称す

尚白 大津の人也江左三益と称す木翁と号す

木節 大阪の人醫以業と

郊七 向井氏長寄の人

魯町 同上名字

山店 江戸の産石川氏

北 北鯤り弟也

北 北鯤り弟也

北 北鯤り弟也

北 北鯤り弟也



遠水

江戸の人樋口氏五郎  
兵衛町に住す

普船

等先寺小

江戸の産佐保氏甘雨亭と号、後介我と称す、享保三年六月十八日卒、春秋六十七歳、浅草本願寺中

山川

江戸の産、名字未詳、其角、門人也、角、筆意を学ばず、清書たる、雑談集に書

巖翁

江戸の人也、其角、親友以下、名字未詳

龜翁

岩翁の子也

全峰

江戸

花紅

全

溪石

全

卜宅

全

巴山

全

宗次

全

落梧

全

揚水

全

元志

全

嵐虎

全

嵐推

全

素男

全

柳陰

全

等哉

奥細道、小越前福井、小隠士等載、云人

を尋し、見

力、同人、

市隱

美濃、岳井

竹戸

美濃

如行

全

子尹

全

史邦

京

暮年

長崎

烏巢

三河



塵生

加州小松

野童

加州山中俗稱  
泉屋久米之助

挑妖

猿雖

良品

示蜂

祐甫

槐市

勾空

全金澤

長和

百歲

以下伊賀連衆  
名字未詳

車來

半殘

須琢

万乎

杜若

少年

卓袋

一啖

水同

澤雉

石口

長眉

一桐

裾道

魚日

木白

配力

園風

利甕

式之

昌房

盡好

以下膳所の  
俳士



游力 探志 蟬鼠 泥土 朴水 且藁 羽笠 杉峰

以下尾張  
名古屋

里東 及肩 支幽 怒誰 正秀 芥境 薄芝 野水

何處

大阪

之道全

珍碩

江州湖南

智月

尼

大津乙州  
母也

羽紅

尼

京凡兆  
妻也

田上

尼

長壽

千子

京向井益壽院法印  
元冊  
女元桂  
妹

去來  
姪也

款子

伊賀

坂上

氏

津國山本

扇

膳所

遊女

奧州

東都新吉原茗荷屋名妓歌俳香茶に長  
最能書の聞へ世ふ知処也其産ふ因  
て名付しとかや



集採共計一百十五家  
句選統載四百十八吟  
歌仙四卷百四十四句  
幻住菴記并詩凡右日記  
大草漢文跋

猿蓑ききの巻之一

晋其角序

晋子其角は集の序と書る祖翁彰風興立く末代蕉門の  
龜鑑と名を冠すの集去牙凡北撰志たること祖翁於  
骨の能潜家子定まぬる乃集をまはし集全初の始末を述  
のしりて末代蕉門の心は才一の蘊奥にかけりてされハ序  
世抄とあす亦晋子序文の意りて言外の餘を撰  
以て序と名を冠す序文の意は既思く味を興く考考の  
俳評序文の難ありあはるなほ注解をたして後学の楷  
模となす之初学のしもの批抄外の餘味を撰りて序  
要するのし







家のみくづつ海軍といふまゝの向の上り魂の入て人と感  
せしむるハつふ不及なる鬼神を感せしむるは世道のまづ  
まづ身のみを魂の入やうの上りかしてさもあるさもある  
まゝを立おりしうくもなきもや成りしうく作りにては実  
すもつらなる舞と感せしむるはさなるちけの幻術かして  
手つ海軍といふ方の上手也といふまゝかしては魂の入るを幻  
術といふは是は序文の肺肝かして又未だおるるは幻術  
ありと二府と書しるまゝは眼につく愈き二字あり初  
学のまゝのまゝ考し書し初学はみぢびくは二才一書あり  
家をさし會得せしむるは家小家をさしめく家の中  
家を語るふいふははは血を念の向のまゝ出するといふまゝ

久しく世おとまり長く人ふりつる不  
安な世な成りしむ

久しく世おとまりしは宗濂以てありしは一風連歌を  
家作ししは又宗鑑を武かしては頗るは肝  
成興ししは伊勢の宗一をいふは流を付し自徳より盛なり  
きて宗因又一風を興しし時ふいふは自徳より流宗因は流  
并ひりしはこれ佛僧の世に始り終り止るるは之し  
まは書長く人くかしてありて家化をいふは義を名  
の家よき人よ其風を化ししは佛化の意は  
まゝ安ずるなりしはこれ古今の流傳ありて深







のたすしひしひ字と用ひられたり一字書かざるは五徳五香  
五音の義して古く月ひらき一若く白く魂のちりけは実  
情なり一実なけれは感あり一感ありて六只る言半句  
魂成りて中気祖翁の幻術を其妾情の備り成りて時八百  
百代もふ実の事なるるなり一徳は徳の集つるなり  
徳なり不愛のあり成りて徳なり一徳なり一徳なり一徳  
是との四句作のり成りて次の段は五徳いと云して一徳  
の徳と挙りて一徳なり一徳なり西行上人の探其抄の古るなり  
出りて文哲とたくまなり一徳なり

五徳ハいふ不及は心成りて一徳なり

なるとかあり

五徳と仁義禮智信の五徳は是ハ天より人へ受得るなり  
性徳なり人へ賢不肖の遠ひなる備りざるなり一徳  
は其朱子も仁義禮智の性と大学の序も徳なり性  
は天より受得るなり一徳なり一徳なり是人へ備り  
る徳は蒙引は徳ハ得るなり一徳なり一徳なり不徳と云  
ふは徳ハ仁義禮智の總名と周季候は徳ハ一徳なり  
も徳と徳ハ四性なり一徳なり一徳なり仁義禮智の徳  
なるなり一徳なり一徳なり信なるなり一徳なり一徳なり五  
徳なり一徳なり一徳なり一徳なり一徳なり耕



ハコノるるりなきと同一 俳社ノ為ハ夫より更なる  
仁義禮智信ノ五徳を養ひ育つる事ハいふまでも  
なく心せらるる心も微心コウラ一たしなき心コウラ一  
あるものこといふ言ひたしなき心コウラ一嗜好セウコウといふ事  
ありて言ひたしなき心コウラ一義ありて言ひたしなき心コウラ一  
といふ事ハいふ言ひたしなき心コウラ一退け慎シラカみなり  
なき心コウラ一五徳の大なるいふ言ひたしなき心コウラ一  
なき心コウラ一なき心コウラ一なき心コウラ一なき心コウラ一  
なき心コウラ一なき心コウラ一なき心コウラ一なき心コウラ一  
礼智信乃五徳をや一なき心コウラ一なき心コウラ一  
なき心コウラ一なき心コウラ一なき心コウラ一

弄小瓦の俳諧も蕉門の一風を禪也偈頌ゴの傲オウハ正心誠  
意の一物とて言ひて説けるも昔子言西家酒を以て  
と昔子譏るといふ昔子の昔子も言ひてぬ人のいふ  
蕉公蕉公一の門人大僧を以て戒め戒め言行の西家  
ひてハ一言字句の戒も言ひて又句の上も言ひて  
言ひて又五徳の説終したる言ひて言ひて言ひて  
兵の馬より上西門院の命場の方へ送る言ひて  
伊予の文字の伝へて言ひて言ひて言ひて言ひて  
勢負夫考り五徳の文字とハ仁義禮智信の五徳を  
いふ言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて  
といふ言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて言ひて



仁義禮智信の善へ何れをもとてせざるは温良恭儉讓を  
其六孔夫子の外余人の備はざるは其徳は子  
及るはとてあへて又徳えり能はざるは五ツの徳はとて  
りて奉てけむ徳ありとてはもたざるは徳也

彼西行上人此骨おそく作りしは  
其をよめる笛を吹やうふらん侍るとしされ  
るる人年ハ味て侍るも子のあまのこころを  
き保ハ友魂乃法のとりてふ侍りや

かの西行上人のとい探集抄上人言聖の奥か行て去  
たしくかゝるいり聖の京へよるも後聖同くうそ也

といふは日月の情をもわらまらん友も無しくさるし  
た夢を先き身とてけりて遠て侍るも人のあまの似  
作かかむ危も何くもてかもれく侍るもあまの  
徳のあまのりてあまの人も心うのあまのあまの  
もかくあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
かかむもあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
しとて野たるとあまのあまのあまのあまのあまの  
魂の入るのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
彼夢のあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
名もたしとてあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
成出するあまの死物としてあまのあまのあまのあまのあまの







ろ方か引くけて世乃伴以悟をまうとさる通一さき六下り  
いふ所の魂や文字ふ力と入てける文の魂成こしとくも  
五の存のりより通するはと五音の傳をいふ成りまは  
かるといふ又五徳のあつりけて書るると味ふ通一及  
魂の法ハ探集抄の詞をついてあのみ魂の術を成り日  
く何といふ成文をわくるは術にだてと詞を法もたて  
詞を同意の是文章よりハ古るは文章と取て文を習ふ  
義成通ずるの如くおのりくといふとくといふ成り  
やうかしてさきお成りといふ意の字かて又一段の文より  
これより終ると又一段都合の序文也文章ハ位の  
かつと通とよく味ふ通一

さむかたさし一みか入きまハアイウエラ  
よくひまをいふかき舞はたきもせぬ  
通一

さき六ハの上成文て下をたさきの詞かてたのぬくをれ  
はといふ義も同く一魂の入るはといふ句を魂の入て  
次は情を突をまはしたるはといふ義のアイウエラと  
日本五韻の物心本よりて是より五千韻もあま生す  
お義もけ五音ふよく通するは外ふお義なり一と通則  
上よりいふ所の五の存のけ五の音とよく通するは  
まはつていふ成りも何とくもぬ向のく生す



るものまでけむ音千通し〜と打つて魂の花実を  
たけりたるんふらといふ多岐名句も句も吟し〜  
出さるる〜といふ多岐の今昔六文字の外に多岐を  
巧みりたり〜吟し〜千一句の情も成りて其れ中  
の扱ひ説し〜成りて多岐〜漢文或ハ詩句多岐  
今昔といふ成り〜と〜といふこれハ歌連俳を千句  
といふものなる〜んば一句も多岐とあも多岐  
は多岐といふ多岐と〜と〜とハ生涯俳社ハ多岐  
〜〜〜

只俳諧を魂に入らるる舞ふて世を〜家

翁行脚の〜何賀哉〜山  
も〜猿も小暮と着せ〜俳社此種  
我入るる〜た〜ち〜乃  
た〜叫び〜に〜  
幻術た〜

只俳諧の魂の入らるる舞ふて〜  
〜下〜何賀哉と〜文章成り〜  
妙もの〜何賀哉〜  
小暮と〜俳社〜  
〜と〜







志るゆゑ一<sup>つ</sup>づき小<sup>小</sup>懼るるを<sup>を</sup>幻術と<sup>と</sup>ハ何<sup>何</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>ハ<sup>ハ</sup>豈<sup>豈</sup>  
といふ意<sup>意</sup>中<sup>中</sup>々<sup>々</sup>た<sup>た</sup>ハヤ<sup>ヤ</sup>モ<sup>モ</sup>モ<sup>モ</sup>之<sup>之</sup>所<sup>所</sup>中<sup>中</sup>中<sup>中</sup>越<sup>越</sup>る<sup>る</sup>幻術<sup>幻術</sup>  
何<sup>何</sup>れ<sup>れ</sup>ハ<sup>ハ</sup>幻術<sup>幻術</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>文法<sup>文法</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>文<sup>文</sup>詞<sup>詞</sup>ノ<sup>ノ</sup>力<sup>力</sup>と<sup>と</sup>イ<sup>い</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
作<sup>作</sup>る<sup>る</sup>之<sup>之</sup>を<sup>を</sup>北<sup>北</sup>則<sup>則</sup>ア<sup>ア</sup>イ<sup>イ</sup>ウ<sup>ウ</sup>エ<sup>エ</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>の<sup>の</sup>旨<sup>旨</sup>と<sup>と</sup>イ<sup>い</sup>ハ<sup>ハ</sup>家<sup>家</sup>の<sup>の</sup>旨<sup>旨</sup>  
に<sup>に</sup>て<sup>て</sup>句<sup>句</sup>の上<sup>上</sup>も<sup>も</sup>文<sup>文</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>漢<sup>漢</sup>文<sup>文</sup>と<sup>と</sup>イ<sup>い</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
す<sup>す</sup>一<sup>一</sup>々<sup>々</sup>ハ<sup>ハ</sup>旨<sup>旨</sup>と<sup>と</sup>イ<sup>い</sup>ハ<sup>ハ</sup>る<sup>る</sup>也<sup>也</sup>

これ<sup>これ</sup>を<sup>を</sup>元<sup>元</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>此<sup>此</sup>集<sup>集</sup>を<sup>を</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>  
の<sup>の</sup>名<sup>名</sup>符<sup>符</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>さ<sup>さ</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>見<sup>見</sup>え<sup>え</sup>る<sup>る</sup>序<sup>序</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ん<sup>ん</sup>  
と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>魂<sup>魂</sup>成<sup>成</sup>合<sup>合</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>去<sup>去</sup>来<sup>来</sup>凡<sup>凡</sup>兆<sup>兆</sup>乃<sup>乃</sup>は<sup>は</sup>け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>せ<sup>せ</sup>て<sup>て</sup>書<sup>書</sup>す

これ<sup>これ</sup>を<sup>を</sup>元<sup>元</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>六<sup>六</sup>世<sup>世</sup>氏<sup>氏</sup>積<sup>積</sup>襲<sup>襲</sup>の<sup>の</sup>句<sup>句</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>序<sup>序</sup>も<sup>も</sup>  
を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>由<sup>由</sup>て<sup>て</sup>書<sup>書</sup>す<sup>す</sup>也<sup>也</sup>五<sup>五</sup>行<sup>行</sup>の<sup>の</sup>五<sup>五</sup>音<sup>音</sup>  
ち<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>孔子<sup>孔子</sup>家<sup>家</sup>語<sup>語</sup>云<sup>云</sup>五<sup>五</sup>為<sup>為</sup>音<sup>音</sup>主<sup>主</sup>獲<sup>獲</sup>故<sup>故</sup>獲<sup>獲</sup>五<sup>五</sup>月<sup>月</sup>而<sup>而</sup>生<sup>生</sup>  
と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>孝<sup>孝</sup>慈<sup>慈</sup>を<sup>を</sup>出<sup>出</sup>す<sup>す</sup>文<sup>文</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>心<sup>心</sup>を<sup>を</sup>合<sup>合</sup>する<sup>る</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>  
魂<sup>魂</sup>を<sup>を</sup>合<sup>合</sup>する<sup>る</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>魂<sup>魂</sup>の<sup>の</sup>入<sup>入</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>六<sup>六</sup>  
句<sup>句</sup>の<sup>の</sup>一<sup>一</sup>は<sup>は</sup>肝<sup>肝</sup>要<sup>要</sup>の<sup>の</sup>一<sup>一</sup>は<sup>は</sup>心<sup>心</sup>也<sup>也</sup>六<sup>六</sup>は<sup>は</sup>示<sup>示</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>也<sup>也</sup>の<sup>の</sup>魂<sup>魂</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>  
字<sup>字</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>也<sup>也</sup>心<sup>心</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>也<sup>也</sup>晋<sup>晋</sup>の<sup>の</sup>狂<sup>狂</sup>者<sup>者</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>志<sup>志</sup>の<sup>の</sup>鳥<sup>鳥</sup>  
と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>也<sup>也</sup>心<sup>心</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>也<sup>也</sup>仁<sup>仁</sup>義<sup>義</sup>禮<sup>禮</sup>智<sup>智</sup>信<sup>信</sup>の<sup>の</sup>五<sup>五</sup>徳<sup>徳</sup>也<sup>也</sup>書<sup>書</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>  
也<sup>也</sup>物<sup>物</sup>の<sup>の</sup>情<sup>情</sup>を<sup>を</sup>通<sup>通</sup>じ<sup>じ</sup>た<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>生<sup>生</sup>ず<sup>ず</sup>也<sup>也</sup>甲<sup>甲</sup>斐<sup>斐</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>魂<sup>魂</sup>の<sup>の</sup>入<sup>入</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>  
也<sup>也</sup>六<sup>六</sup>は<sup>は</sup>形<sup>形</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>也<sup>也</sup>人<sup>人</sup>の<sup>の</sup>姿<sup>姿</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>也<sup>也</sup>五<sup>五</sup>徳<sup>徳</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>す<sup>す</sup>







まの罪とるゆゑに四子の子のみを文と俳陽の風土  
流志未許六小枝幸子由支考素然こ余も積多し  
根ふ道翁の稿きうと、道翁乃末流と濁るこのま

猿蓑はくし 芭蕉一紙

猿蓑はくし 芭蕉二

冬

初しを猿も小蓑をほしけ也 芭蕉

此集を祖翁新風興立最奇一紙集や一紙撰去いふ  
凡此たりといふも祖翁の指揮みまゝのまゝして祖  
翁意の舞勺舞二其角うあう渾ぶ意味あうと云はれ  
よのふや梅も小江湖集永明頌云孤猿叫落中岩月野  
客吟残半夜燈善會大師語云猿抱子歸青嶂後鳥啣  
花落碧巖前雖猿但無心而啼猿客愁人因已心中有  
愁聞之則斷腸生愁此愁恨全不于啼猿何者猿一向



無心啼故不知愁也又云啼猿非道恨行客自多愁廣  
聞和尚頌云越山入夢我重々歌處應難忘鷲峰後夜  
聽猿啼落月又添新寺一樓鐘此頌靈隱猿一樓鐘也  
悲聽す。頌より猿鐘一對の作猿の巻及び二句五言字  
句。一。探らぬ真享元祿の宵江郎集成以て禅林の語  
あるやう極きやう祖翁の俳意をよつて起るものや。ま  
新風は能台心触し出ると示したるものと云む。一。此集  
乃頌より世句を起さるるを六つを白くしたる於佐一  
猿の巖下はかきもあぬれもあらず眼前よ見えて時  
の寂しき何れもなくさむきと人々心成動るは布一け  
ららふ子又なる乃現力なり。一。手つ海の妙子といふ也。

この句は「け」乃五文字小塊の入るる古説は定家等の  
條たがて書らばはれおのまをひたひと布一乃ほ一けら  
といふ歌成りて翁とあまを取て猿と人といふとあはれ  
ハ小昔を布一けと精とらま一なりといつりまはるる  
取らると評一又猿と人といふはいつる祖翁の能力  
成歎まふ也。一。さるる子孫有るると田子趣るる再三吟  
一。て言外の余なき時雨乃うら。初乃字を重くしを  
あし。一。折るる心存るぬや。俳を重くして風情あはれ。一  
初の字は好ると評心得るるとさるる意は。一。賞歎  
此字と意侍重くする。一。由公羽みぬ伊豆の山越。一。るる  
乃吟ふ。一。巴峽の啼猿涙こゝも成るる成すといふ猿



客の思ひ小暮夜をけしけしふの字小會して情降りあ  
と晴ふ趣

あはれゆけと時日好むおの清の夢 其角

導生八牋五云水樂洞雨後聽泉豈無身哉更當不  
以耳聽以心聽といふまよひぞ人乃見ず樂を愁するは  
心以て本とす眼身口鼻はまのむを取以ての完かて是  
蕙門の句と作る乃本たりおにけ句心髓の句といふ心とん  
ころふ字といふ心才一乃工夫とま家夜令傳して好て祖  
符の俳諧と語る趣一世句香子と逸興初冬寒寂乃  
風情一以のうに遠なるの清のあり小清くは時句は板庇

そはける春日割をを渡りするはの燈火ふささるるまてこ  
外の餘情をかく一実は一時の美逸多の趣一古往  
ふ小暮の夕に竹葉は父をて世自ら母なり次くの夕は  
春を出す之あをさすといふまの清のあり小暮城外の志と  
おどろのうま三井の清と六つとてまに姑蘇城外のまてとら  
姑蘇城外寒山寺夜半鐘聲到客船と作まは張繼の詩  
乃句取て往けるま言外の餘意是小懐ふお趣うに深く  
味ひて探ふ趣一予等の餘情を味ひて後尾之の了輔叟を  
訪るるはり叟香子と自函瀆の一軸を持てる葛のわらうに極に  
丸瓦ひきかけしれお燈火を點一其上にけ句を書きし余  
情暗かかする道小志のうはさひと花燈すはをまけしもの







と眼あふありかけぬくら舞とひぐくみふえちたす

澁持乃松振とつ家一と色世膳所 正秀

松振乃つるといふ松の字魂之鏡持乃澁振とつとま  
魂なるる趣一よりし味ふて知る趣一鑑松舟の奴がむす  
しとまのむふ風ふいぬ一くさ成ひま一との推サまを尻  
ひつりしげべん一色の勝ス何々銅造乃大小に大を毛れ  
伊達乃々一とつとまのまにたれやうふんつと魂の入ず  
西燕のまの海程乃一字子てみへおくぐ

廣沢やひととき時一可一はなをり 史邦

其の形大橋寺の心一と心一は眼の上より白子一條あり  
向き人名とつとまのほま一くをなぬま一とみは獨り  
いふお魂とつとまの趣一は雨申程にあり一雁  
鴨枯芦枯萩堤乃枯柳一と景物條情お備たり  
ひらとつとまの心にはなきとつとまの心ふ向子取ると廣  
獨の心合せお廣沢とつとまの廣沢の池山城國之

子人子ぬらまはと色世一時一可一茶 尚白

ぬらまは半ぬれとつとまの心は時可茶と思ふ勢田  
思つとまの心は子人の子け合て茶とつとまの心は



たゞこれと今とあつてもさういふさういふ遊水の風景  
船中の情面なく無事さういふ自心と思ふ無事  
ぬきて舞うさう眼さういふ舞を付に俳情あり

伊賀貞の境に入と

なつりー也をふらむ此隣の一雨 曾良

伊賀の境に入るとなると此の一雨は着てぬれず書る  
さういふ古語なつりーさういふ昔の京と此詞とこれり  
いつり此句は雨の境さういふや奈良の昔の京は昔  
思ふ舞の風情さういふ時さういふ吹ふさういふや  
の五文字をわらひ成さういふさういふさういふ都を

思ふなつりーさういふさういふ此句は雨ふおしやうさういふ計  
う情田の思ふさういふさういふさういふさういふ伊賀の境  
さういふさういふ此句は雨ふおしやうさういふさういふ  
思ふなつりーさういふさういふさういふさういふ

時二句るや思ふなつむな窓の窓あり 九兆

此句つとさういふ思ふなつむな窓の窓あり  
内さういふ詠め作さういふ作さういふ思ふなつむな窓の窓あり  
此句つとさういふ思ふなつむな窓の窓あり  
思ふなつむな窓の窓あり  
窓の窓あり



るかりて竹田は里や行時雨 大津 乙州

竹田の里を山城の石河をうりてのりてのりては字濁りてよ  
むるをこれ清陽のりて向意通よまらぬえよ向意城味ひぬり  
清陽は定むる一陽矣をくく清陽をさかす向意  
まばでとよまらん共からでとす意をかりてとけりてハ清  
よるくくみ流ゆれどからでとよまらん共からでとす意をかり  
まハ馬もかりげふたごもくくや日もたけくくくくく意を  
乙州竹田の里へりて時雨はひる民衆とまらぬ村時雨  
の向意くく幾と行とけりて向意行の字とくくくく  
萬もよ集の例もくくくくく日の子條情もくくくく

づまの流志云芥川の竹田をくくくくく一古歌も五芥川家七  
同河系古くはりし相向は玉ハ木橋乃里ハ馬ハゆきとの侍あ  
るくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
駅盤屯地ゆほりくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
原つづま古乃侍はま竹田の時雨ふ通をいれは佳ハ  
のあまなり神勝もくくくくく馬かりてけりて止まぬ  
馬もたけよふめれていよくくくくく安情を向ふなりたり借乃  
文子魂をあの何やう有るをくくくくく乙州くくくくく  
くや田ハ山梅葉ハ山城の本物の里ハ馬ハゆきとの侍あ  
るまに會くくくくく君と思はくくくくく歩ハ踏まぬ  
おろれかりわけて馬借てくくくくく一踏くくくくくお借借



の子孫たるは御尋ねた井田とて一井馬と枝折るは  
成ぬとて世雨士の説くはまゝ一理ありてはるるもど井田  
の里とよ所穂とありはは御尋ねた井田とて一井馬と枝折るは  
あやも推し合ふるもめられど自然の心ありてはるるもど井田  
井田の里と木場の里とありてはるるもど井田とて一井馬と枝折るは  
浮きよれまき船とありてはるるもど井田とて一井馬と枝折るは  
の白に御尋ねた井田とて一井馬と枝折るは  
たることこれと分れお心りやもされは名のとて生るるもど井田  
一井馬と枝折るは御尋ねた井田とて一井馬と枝折るは  
も御尋ねた井田とて一井馬と枝折るは  
くもせられは詮き一井田の里をたきしは馬なりては木場

の里よりあるはあれとかちりてはるるもど井田とて一井馬と枝折るは  
御尋ねた井田とて一井馬と枝折るは  
濁るは御尋ねた井田とて一井馬と枝折るは  
あやも推し合ふるもめられど自然の心ありてはるるもど井田  
井田の里と木場の里とありてはるるもど井田とて一井馬と枝折るは  
浮きよれまき船とありてはるるもど井田とて一井馬と枝折るは  
の白に御尋ねた井田とて一井馬と枝折るは  
たることこれと分れお心りやもされは名のとて生るるもど井田  
一井馬と枝折るは御尋ねた井田とて一井馬と枝折るは  
も御尋ねた井田とて一井馬と枝折るは  
くもせられは詮き一井田の里をたきしは馬なりては木場



ゆきあみ林田乃竹の雪をゆきあみまらみふ探り求るはく  
の心ふあきぬ——けり靴意門は探るる白うけ具角  
その妙を尋らるるのこころは餘人まよふけり靴ゆき表  
裏をひき句意を二倍み味ぶればはは深意をばか——  
又るゆりて蓋直りみかきしり白の目ドての雪をまら清  
て清なりしりては句の層も亦とよりとるる句しりま  
ふ落着くと後意の説を俟て断をなす——

た まききき——星乃光りやゆか—— 金 羽紅

と雪の層まどと星の光りふん定めるまらふくくは  
も小おしられるる上の女文字ふて句はきしりて

新田ふ得殺煙る——とまきき 膳 昌房

まききなる通りよて田家村——まきの閑寂之物を  
ふ手柄を——得がらふて句はきしりて新田といふ  
に趣出来たりとるる趣——

いそか——や仲の時雨乃雪の帆行帆 去来

上の女文字にて句はな——とまきき仲乃時司のまきき  
望ま眼前見るるも——去来云猿まの羽風の始時  
雨ら世集の美自なるを句仕換——侍るた——  
や行帆よりけり一時司といとるる心の移なりかかへん先











盤木乃落き六身なき六松乃落き六身なき節つらむを  
しよとく六辭を以て志を害しとく多し一序歌  
曲の事ハ白毎々備らざれば断絶せむと心得し

百舌鳥のめね歌中ハ杭よ十月 嵐蘭

世向の上の境に―と祖翁粉骨乃場をけ句と其  
室よ入つし山を―とを織端のうとよお心ハ軍ハ  
つぎのふり神子母子とあると疑ふも―と六云々の足  
系以尋てある想―と社もるつ十月のちお枯くふあり  
ある廣野の子母何とてんも懐旧と傳すむとある  
は枯木のこめぞ子懸乃已むむとあるたてあるハ家ハ  
特聲身人の腸を断思ふるあるとさうんや丈夫集存  
笠右大臣の懸のたつた枝ハ枯も志りのれて何―との系に秋  
そらとやうけ歌のさめち思ひ合せらるる片歌と云杭とめて  
写るハ言外ある也―

こから―と頬腫痛む人乃歌 芭蕉

風の吹きたる子虫歯のつとつて強かえおる人乃抑採眼お  
たり人つてせつづるも白葉ハ―と本枯の理を解とてさう  
風乃用と失らばハこから―と頬腫痛む人乃歌と王  
照君ハ胡西ハ顔ハ馬上の姿とつとさうん上陽人  
云―と固よりあると毎ハ世ハ思ひ合せらる―と句のよふら







て魚行を引くはさへも怪しうてさきより通るの心魂を伴  
ていふは佛の法を学ばず人心の志願を以て思ふ合をばれは地  
佛心も起るにいふは邪見疑忍乃徒となりて天地自  
然の道理を解くべしと日くぬる罪業成すは  
その佛心向ふとのよりてさす所の句と味を會し  
掃もたのめく人惑て美しく色成させは法まがわらう  
うのと枝を残りて懸る成るも性の法より人跡を  
いふ成念する白く又世帯の人惑をうつと知れぬ人  
えり又親鸞上人の教後抄掃のふとふふ行をうた  
と乞ふるお上人の哥の掃のふとふと有成りて是に  
の心懸掃をさるるとよきと云ふ合を會し

茶のむやむく人なる人 聖女 越人

其聖女の靈照女の誤字に女禪の字を以て志すも  
さきハ禪の字を娶る人なる人茶のむやむく人の愛で  
る印もなきはさき由りてさき後しげなる又みこつ極  
がさきと含み茶のむやむく人なる人掛合を  
靈照女の傳燈録。麗居士語録おふ出りて靈照女朝文  
父麗居士おはして父さき禪をさきりその父おき年入滅の  
期に知りて日中午時お寂を會しと其照として日中  
成せしめしと其照いよく日中くされど日蝕何  
と告り麗居士戸を出て日ごとく成るいさふ其照父







かて向成あすを冬梅の用と記すに

公母の比土田子閑居を記す

雑水のなとこちあはみ 其角

望田子閑居より記すてと子るふして望田本福吉  
子那ぐりともある也一雑水の名西六例の垂子う西落  
にしてヨ尊考の久乃云生るぬうする作之道翁の久  
記しゆふあすといふも其ものと賞して閑居をな  
いさぬふらん望田の系枯の記系ハの中もさくこをら  
雑水ありけりうき記考う元年つてちあぬと記述作  
小雑水乃名系あすといふ作れる之雑水の名ふすある

あすを記せらるるあんとひびくもあす之西落の記  
ういへ能き十分とも懸し此向祖翁の望田閑居小雑  
水子甚芭す形の子綴れといひあひる小思ひ合せて  
幻住菴ふての作とてくさねハ五元集ふハ幻住菴あてり  
端書たり食教の雑炊あふ文字あてりぞうずあすへ  
とく大非之祖翁の時代とハ系系例あふて假字後

あのをさき牡丹乃花のま川 稞 伊賀 車来

冬牡丹の作す川稞の心魂よりと味あぬ一初夏あす  
牡丹花よりあすかむかぬるよあすてあおさあすの志  
おこたむに花の勢ひよく寒さよめげぬすあすのあす



まの程の西風のまつぬ

草津

晦日とるひのこころ 尚白

十月のつごりりい子津を焼く餅を喰ふて亥子を現  
しるもそと世日とるひのこころと焼くかゝるも夕方のま  
つひの夕べ焼く女の年たけしと称中してさむいと焼く  
字魂之又晦日の字動は焼く亥子として亥猪の餅動  
かゝるも夕べ

神迎水口とるひのこころ 珍碩

十月朔日諸神出をいふはさるとちんをねて送る心と神  
送るといふ十月廿日と神迎るといふ心と神迎るとい  
今深冬の俗も九月廿日と荒神の儀まのふとてまの息  
神送るといふ之位吉の神送ると同日に神迎るといふ  
出るといふ亥子略を向は意ハ江南の塚碩々也沢旅亭の  
とらふとるひ十月廿日と神迎るといふ日とるひといふ  
やとぬふとるひ十月廿日と神迎るといふ日とるひといふ  
かゆり煙草とるひとるひとるひとるひとるひとるひとるひ  
流るる雲脚とるひとるひとるひとるひとるひとるひとるひ  
み口とるひとるひとるひとるひとるひとるひとるひとるひ  
み子行の流るる雲脚とるひとるひとるひとるひとるひとるひとるひ



赤後の駅やうりたまふはさうりたれとみ口のみなぶ  
ちうりやうり西條やうりるる路のまのむしふりかけては首に  
ふくせある魚——ニキロ 碓氷音夜過山といふ杜荀雀う  
うの伊予通うりばさ山おほいしむる之或ハ石部おほいしむ  
えをさうりつる人く何れとまはるの場の宜き定むる——  
予ハ一句の意とよくはるはす——す

正月朔旦  
赤 柏 伊賀 良品

赤月と赤豆梅月といふり朔旦といふ朔ハ朝日のよき  
り——曉といふり之程元朝を元旦といふり同——赤

柏といふ増山の丹云共キヤウニヤニ工氏の子冬至ふりやうり——イハ役鬼と  
まきり赤豆はねをりやうり冬至の日何づき粥をりて  
是を拂ふと荆楚歳時記もはうりも冬至のりやうり叶  
朝日おほいしむる——イハ赤豆の餅を用ひてりやうり  
されおほいしむる——イハ雑名お——赤の餅といふ婦女  
子の餅紫あり赤の餅といふ俗名といふる也——イハ粥をかき  
下か——イハ粥するり日本紀もいふり予り俳諧多識  
編もあ——イハ説くもいふる不略すりやうり意ハおほいしむる餅は  
り魚肉も野菜もよく汁香の物も赤豆餅もよくい  
り——言外の余意も赤柿のまのむしやうり中イハの七文字も  
魂也やうり又赤柏といふていふり冬柿の余意はる



夏草の朝日を影ひして作りしもの意ありきかゝるる

あはれ月の水を移しやあはれ仙也 羽州坂田 不王

此句は手子虚をつきたるもの海にけりし海祖翁のたまは  
幻術乃身してまほはるは行きてとりし魂とてさるる  
句意は諸くのさるるを枯きあめるものさるるあはれ花の青  
しとまほはるる中を繋くは成ぬきんてさるるあはれ花の青  
と思ひしは水仙の定てあはれ炎暑の冷泉と移し  
さるるあはれ花の青とさるるあはれ水仙の水の字と眼的あり  
作るる人への妙のあはれをさるると思ひしは虚をさるる海に  
云あはれ句法にして初心の生はぬは又さるるあはれ花の青

も亦かゝるる花の青——は種あはれ——てやとひびく——説よ  
土用中水仙乃根がみよはして極れるさるるあはれ花の青  
あはれてあはれけ句の意にかゝるるさるるあはれ花の青はけ句法  
実り花の虚に傳くのさるるあはれ花の青——

今六世はあはれむら——さるるあはれ花の青 尾張 日暮

時よりあはれ——は已針花のさるるあはれ花の青をさるるあはれ花の青  
あはれ花の青は針の末をさるるあはれ花の青をさるるあはれ花の青  
向してあはれさるるあはれ花の青をさるるあはれ花の青をさるるあはれ花の青  
かゝるるあはれ花の青は日向のさるるあはれ花の青をさるるあはれ花の青  
たはれしあはれ今六世のさるる日向のさるるあはれ花の青をさるるあはれ花の青



こころのまじりておぼしきやの文やまじりておぼしきやの  
けやの字やまじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
てまの字やまじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
富貴をたのみく人かおぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
をまのまじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
いりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
一むの心厚くおぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
そりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
そりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
今世をたのみく人かおぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
まの世も仁義礼智信の七ツ成りておぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
とておぼしきやの字やまじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの

尾頭乃こころありて海流也 夫未

世間風俗の形容眼お伴の秀逸はみみ形容の句皆去  
まじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
再と吟誦してその形容実れ海流乃ありておぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
心しなまじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
まじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
め況たりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの  
尾頭乃こころありておぼしきやの字やまじりておぼしきやの字やまじりておぼしきやの







うしろ髪ひくく道の柳を花 貞徳

草の葉もやせ果てぬかたれは

まのいし口やさくせくさるる

かきあがりなくは夢うきよ虫の糸 宗因

かきあがりなくは夢うきよ虫の糸

小かきあがりなくは夢うきよ虫の糸

是本の教ふく祖翁政風毎日の後いさふけり調と  
用ひぬげされど其旨おれけり調成作れり然る祖  
翁のまじりて字證以本の調かへて文し遠る不は甚  
の体しりてお心のほかはも場を古風は只徳語をとりて佛  
言のこもりてはありて佛性あり一慈風は佛言洒落

は情を備ふて以て本しりて極電公あり向ハ其の師とて云  
とこの事も茶はよく味少くしりての事もハ物かへり  
おなく用由とてその下ハの字と係わらるるもふりて彼と  
是とぬらつらふ用やとされは茶とやのゆとやのとて  
とりて喜ふ通ふと名も一それゆ縁語も動もやうも  
るしとありしつり日ハ動もとりて茶もつめると云縁語を  
湯ハ茶といふ縁語り茶のゆと一物の名目ありて二物  
受てつあふと縁語もなむづゆと縁古とハ世に  
の縁句ありてつめりて縁の意ハ茶のゆと  
風流の樂もするもそのまじりて又ハ茶とてつめり  
て日ありて縁古と名ハその名をほるるもふりて







孫ころろやこころの浦糸の守めぬ内 其角

世向亦實情中にて孫ころろやの女も亦深と情に託し  
魂とつらき一こころのうらみとあふぬの境は愛情の備はる

門前の小舟もとりて始末をまが 凡兆

凡兆の器を業と守りしれは冬を三秋殊に秋ふまゝ通し一白の  
梅好むしして即座に以て解すをうたへ門前とつら魂中  
の情備まると小舟もとりてあふぬの境は愛情の備はる  
して小舟の自心と守りしれは凡兆寓居の地寺院門前も  
舞一林の中もつらき一こころのうらみとあふぬの境は愛情の備はる

木鬼やおりひ切と夜屋乃面 尾張 芥境

おりの切と物我<sup>ブツガジ</sup>自<sup>ジ</sup>他の<sup>タ</sup>分別なき意に木鬼は陰鳥<sup>ヤンニ</sup>殘忍の技  
子しと夜は小鳥<sup>コトリ</sup>或<sup>カ</sup>林<sup>ハ</sup>中<sup>ニ</sup>ひ追<sup>ヒ</sup>ひ出<sup>ス</sup>て取<sup>リ</sup>喰<sup>フ</sup>ふを<sup>ハ</sup>終<sup>ニ</sup>目<sup>ニ</sup>眼<sup>ニ</sup>  
のうらみとつらき一こころのうらみとあふぬの境は愛情の備はる  
念<sup>ネン</sup>の<sup>チ</sup>禪<sup>ゼン</sup>作<sup>サ</sup>といふ<sup>ハ</sup>面<sup>オモ</sup>つ<sup>キ</sup>と作<sup>サ</sup>意<sup>イ</sup>を<sup>ハ</sup>おの<sup>ノ</sup>こ<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>切<sup>リ</sup>て大<sup>ダイ</sup>悟<sup>ブツ</sup>認<sup>ニ</sup>  
はよ<sup>ハ</sup>あり<sup>キ</sup>架<sup>カ</sup>お<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>り<sup>タ</sup>る<sup>ハ</sup>揚<sup>ヨウ</sup>保<sup>ホ</sup>眼<sup>ガン</sup>あ<sup>ハ</sup>り<sup>タ</sup>る<sup>ハ</sup>如<sup>ニ</sup>

つらハ眼と心切とをけり 伊賀 半残

發白いつとくは意にしは作すしと祖翁の去来もつら  
るる心の作例ありしてはよあり架おまはり揚保眼ありたる如



う屋の鉦ニギは夜ヨカヒ窺カサてさして取トルつてさし之ノ賦ヒるハいふ心ココロを魂タマ  
りしつて本ホを改カめ初ハジめたるはさしきるハいふは彼カれは徳トク多タり引ヒ  
つてさし初ハジめ利鈍リツお違ヒはるハと詰ツて聖教セイキョウを捧ホぐるは射シに  
と戒イミめたるもさるは初ハジめたるハいふはさしきるハいふは彼カれは徳トク  
天理テンリを性セイのちすすあししてさし初ハジめたるはさしきるハいふは彼カれは徳トク  
るハいふは彼カれは徳トクのちすすあししてさし初ハジめたるはさしきるハいふは彼カれは徳トク

を貝交  
ま——つと紙子の切と譲りしる 丈艸

黄金オウゴン用ヨウひあして交カりうウとさしきるハいふは彼カれは徳トク  
と歎息ソウシツの句クこきハ負オい——して交カり益キ百ヒャク子シハ情セイを負オいハし  
風交フウカウみ——つて負オい——さしきるハいふは彼カれは徳トク  
つとさしきるハいふは彼カれは徳トクのちすすあししてさし初ハジめたるはさしきるハいふは彼カれは徳トク  
切キと譲ユりしるハいふは彼カれは徳トクのちすすあししてさし初ハジめたるはさしきるハいふは彼カれは徳トク  
莫逆バクダクの親友シンユウに——して負オい——さしきるハいふは彼カれは徳トク  
もさるハいふは彼カれは徳トクのちすすあししてさし初ハジめたるはさしきるハいふは彼カれは徳トク  
も揚ホるハいふは彼カれは徳トクのちすすあししてさし初ハジめたるはさしきるハいふは彼カれは徳トク  
もさるハいふは彼カれは徳トクのちすすあししてさし初ハジめたるはさしきるハいふは彼カれは徳トク

浦風ウラカゼや巴ハをらつてむ——子コを 曾良

巴ハとさしきるハいふは彼カれは徳トクのちすすあししてさし初ハジめたるはさしきるハいふは彼カれは徳トク  
かきも揚ホるハいふは彼カれは徳トクのちすすあししてさし初ハジめたるはさしきるハいふは彼カれは徳トク











おしくも海にそのはくしの雲をといふ歌の件も何となく又歌にて  
かまふ石の系物中何れに作れしといふべきと俳きるれおが  
びいり中その系物有るもあつてその場にお初めやうに  
作らるるれはふまよきしきもあつて系物にて名に成つたまていふ  
姿も情も作りがくちやうとて思はるるし又古歌の類もあつた  
ちり又名に神祇歌の類やと切りても又下切字を引ひ二行お切  
成祖翁より云傳へるやうに思ふ人ありてやうもはるるに二行お切  
未熟の俳士より神祇の意味成り得るものも又名ふりや切  
といふは度外や美田の計やうと切字よりいふは二行お切とい  
成切より切字よりいふは未熟の俳士より成りきりし類一初  
学のうち遣は切字より不入り作らるるし名ふりや切といふは  
いふはうり切字よりいふは未熟の俳士より成りきりし類一初  
学のうち遣は切字より不入り作らるるし名ふりや切といふは

笑士の心うつる流や死を乃中 木節

世向に笑する人の心うつる流の居るに成揮さし通りて流を  
かつたなきに笑つた人のむつたなきに笑ふ笑するふれたれ又  
流もふ笑するなきに笑する流といふは人情を備へて中といふ  
たしき成切よりいふは草色と言ふおふり

水底成見と牛の顔の小鴨う乳 夫艸

水底の浮沈さうさう又かこくも沈かこくも上り浮びて



死すよとて雲が成るまじくし母自得の風情 曉宮跡より  
そとまつらん 秋つそとと水面眼ぶの景色 鴨の浮沈を  
る 物ほそてまじく息とりし母よまづ海の母しとてまじく

そとまつらん 採入るるる 余吾乃海 路通

去来抄小野明向句の志ほり細くとくいふる物よまじくまじく  
ハ情ある句より細くとくいふる物よまじくまじく  
子れ細くとくいふる物よまじくまじく  
上て先師の句より細くとくいふる物よまじくまじく  
味も魚し 湖水の水面風波となくも周るるに魚の群  
あつたもたつたやうまじくもあつたもたつたやうまじく  
まじくまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく  
の魂やまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく  
湖の底にまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく  
まじくまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく

死すまじく 採入るるる 雁のうた 日暮

雁の法事のころ採入るるるまじくまじくまじくまじくまじく  
と武夫もたつたまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく  
知れぬ句よりまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく  
ハまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく  
まじくまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく







よしんばをのりて下畧気未の母も思ひ合はるるの  
濃きよぬて娘も子力なりと味や金

から志りて蒲原をたるとやみの旅 長崎 暮生

此白ふ自<sup>ジ</sup>他の差おたり他おたる時ハ其の娘は志<sup>シ</sup>お淋<sup>シ</sup>  
まゆふ方の家におりてから馬に小蒲原をたると言ふ  
引疾るよき事とて突ふきの夕暮お淋<sup>シ</sup>と言ふに何ん  
自<sup>シ</sup>おたる時ハ已<sup>レ</sup>からたると小蒲原をたると言ふに何ん  
この娘の思ひ言ひおりの娘とて言ふに何ん  
この馬のゆきやると言ふに何ん言ふに何ん言ふに何ん  
道といふに言ふに何ん言ふに何ん言ふに何ん

見やるといふ娘人さむし 石部山 大津尾 智月

智月尾ハ乙別り母之白素ハ糸白の類と同し石部山ハ  
を定むるハその世帯にての向なり石部山ハ山く白く元  
山一ハ石部村の景色也一ハ実地はいつて深く味は  
旅人の深あることとて言ふに何ん言ふに何ん言ふに何ん  
と云ふるハその地名もハおとて言ふに何ん言ふに何ん  
老少ありて是祖父母の言の幻術也

首出してとつて言ふに何ん言ふに何ん言ふに何ん  
美濃 竹戸



世衣に祖衣を襲ひて脚の踏む人の足踏る故も途の遠  
 孫衣に祖衣を襲ひてその紙衣を襲ひての衣にたるを証めし  
 句未だらば翁の毛途の才も保つては情のうつろき除の  
 たまのしも遠の破きたる紙衣を襲ひて狐腋の白垂衣を襲ひ  
 まさぬりと廿二の折ひたるや翁の風袴ふあやかりてけ  
 衣を襲ひて神衣を証めし句もそとせりやといふ事を  
 首牛してつたてるとかやとおう衣作りたる之翁の風袴ふ  
 少やかりて是うは首牛して世衣の餅土と交り人と云  
 と解さず合ある向うとす  
 芭蕉

紙衣記

芭蕉

古き枕端のさきも南の貴地う形足り侍つて衣  
 の衣傷れぬ簾床の上へは着る考ひぬむ  
 物中も物々めは翅り侍の世をさつ御は其唐帽は  
 通るも白ひ袴もさきをや悪乃逸物とせんむ  
 へなるりしといへや紙の髪をばいぬもあはれは考  
 ありつゝ紙袴の心衣をなせぬいとも驛のさきもあはれ  
 しては思ひて出羽の衣衣とさうふはよてらる人ばらも  
 ばらもさきも紙衣の備へ山袴を唐の枕りさきハ  
 ニ千里の外は月とたきも遠むるもあはれは考  
 下は衣をさきもさきもさきもさきもさきもさきも  
 衣袴の中は白ひ三百余里の險難はつとて終  
 ひり終るとさきもさきもさきもさきもさきもさきも



再掲  
おせ角一  
あつハ俳名  
おのハ

も心のこぶをばききりて負ふ乃情を破るるもさ  
きとふ家世志しむいふきりうちられぬ

按ふハ紙巻ハ宮土川のちり大石田と云ふの俳士甚角一勢五上と  
賜ふと云ふのちり大石田の能はるるおのり師才一の風流なり  
と云ふと云ふと云ふ角一勢う風骨はるる男中なり細道なり  
宮土川のと舞と大石田と云ふ日和を待家ハ古き俳社の後  
こちをさう志れぬむのむく成さるる甚角一勢の心とやんけけ  
んまきさうりたりとて我舌物とみちふもみ途ふりてのみとさ  
らるる人しきむはとつとさき一甚強ぬぬの風流家ハ  
りとも

題ハ竹下ノ今表

あやめハ家手のあくと紙今表 曾良

元禄二年春三月おのり師の時翁ハ從て新水の労破たさけぬ。  
おのり師の句はるる細たふとされハ累々されハ今表ハおのり  
おのり師の句はるる細たふとされハ累々されハ今表ハおのり  
おのり師の句はるる細たふとされハ累々されハ今表ハおのり  
おのり師の句はるる細たふとされハ累々されハ今表ハおのり  
おのり師の句はるる細たふとされハ累々されハ今表ハおのり  
おのり師の句はるる細たふとされハ累々されハ今表ハおのり  
おのり師の句はるる細たふとされハ累々されハ今表ハおのり

魚のりけ鴉のやるせまき珠丸 探丸

珠のちり魚の歌と行の木梢ハ鴉のしきり居て眼と







膝つゝふか——こまり居る 玉敷丸 史邦

膝突ハ小玉敷の縁つきたるよの今の下生あまどその  
送風之か——まるといふ風にあはれ——と妻のわが  
るよ母風情言かよ見へり

檜桐の葉はまゝおちりけり 野童

檜桐の葉まゝおちりけり母の連れたる妻のまゝ——と母とて  
とぢかろくも白実ふみのおちりけり母の使あ実景の夜情言  
かおちりけり——檜桐の 乙女と植りたる庭のゆかりの  
住ちあまのゆきと輝き——

鶺鴒の橋よるこあすり——と 本 示 蜂

俗語小織女牽牛と七夕ハ一會するをいふ。鶺鴒  
河ハ橋とありて織女織——むるといへり信丹とありた  
されたぬ——と云付く——るや——と歌少詩少鶺鴒橋と作  
きりけりよの天の川ハかけたる鶺鴒の橋よりあまが  
高きと云ふやと思ひまのぬよの成るを作しりよハ朗詠  
某七夕の詩ハ露應別淚珠空落といふ句より思ひまの  
海向くまはけ玉敷も織女の涙の氷り——鶺鴒の橋よりこれ  
あまのやと云ふと一語——と作り——玉敷とハた——と  
あまのやと云ふと一語——と作り——玉敷とハた——と



呼らるる軒堂のこゝろに 史邦 凡兆

凡兆のこゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の  
軒堂のこゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の

こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の 画好

こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の  
こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の  
こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の  
こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の  
こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の

こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の 其角

こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の  
こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の  
こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の  
こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の  
こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の

こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の 史邦

こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の  
こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の  
こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の  
こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の  
こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の

こゝろに 史邦の掛合をうけて 史邦の 羽紅



羽紅ハ凡兆ヲ書クハ一ハチハチノ持ビハチマツケニナラズヨク  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ

わこも子ら瓜紅粉のこすやまらけ 探丸

わこも子ハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ

句ヲ一ハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ

下京や二重つむしお乃こす 九兆

下京ハ二重ツムシオノコスハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ  
ニシテハチハチノ思ハチケテハチハチノ風情女ノ情ハチ







の光り成かげんうつろひ詞の糸のよめ詞をかくもたて同  
し力の向ら詞を成ほるよなるといふも魚一け句を六  
詞をちんむちの意違ふ事くも魚一 兼老の老表と  
同一年老おろくともいふるも魚一 兼老の老表と  
のまは兼成かげんうつろひ詞のたぢみかして句意は面  
ふく障るまを兼成の風情もかくも魚一 兼老の老表と  
兼成のまは兼成の風情もかくも魚一 兼老の老表と  
たにちんむちの意違ふ事くも魚一 兼老の老表と  
ろせんふか出らうとていふ句とて魚一 兼老の老表と  
晋子う自己の老表成述成すも句とて魚一 兼老の老表と  
たふあは違はるる魚一 兼老の老表成述成すも句とて魚一

老の老表成述成すも句とて魚一 兼老の老表と  
尾張 羽笠

外の子をまほさうとていふも魚一 兼老の老表と  
いふ老表もまほさうとていふも魚一 兼老の老表と  
句成りして晋子う侍も何う又かまはす一 兼老の老表と  
詩句の風情も何うとて魚一 兼老の老表と

詩句の風情も何うとて魚一 兼老の老表と  
健よまへあは詩くも老の老表とて魚一 兼老の老表と  
老の老表とて魚一 兼老の老表と

老の老表とて魚一 兼老の老表と  
老の老表とて魚一 兼老の老表と  
老の老表とて魚一 兼老の老表と  
老の老表とて魚一 兼老の老表と







る——赤学は心の味だといふ人と数日腸とまゐると  
祖翁の戒りあり——といふ句なきはよき味なき——心の味  
と後述の如き又空の字もか——と判すると思ふ——又竹句と詩  
の互照双關を以て評する人ありなきはけ句ハ自然の場なり  
詩の格はありふたるはけ句ハ空也上人延壽帝方の皇子こ

詩——を 癖の 教の 似ぬもの 乙別

竹句詠たるのありをすて又多人のいふる句作りてその  
妙なるを色里やむくつけなきと思ひやる惣て句を解  
見よのよき其情は探り求むるより才一之影は似ぬあつ句  
は生よお構りいけけけ句のえ——とゆふ

一月ハ、あふ茶を海——と 文州

け句一月ハあふ茶を海——とゆふとて——とゆふとて  
す——とてあふ茶を海——とゆふとて——とゆふとて  
海——とての閑寂を賞——とて海——と一月の程茶を借——  
とてよと戯——とて海——と祖翁四才の一人とて——  
熟——とて海——と満ち——とてあふ茶を海——とて  
あ——とて心は風は句作りてあふ茶を海——とて  
人の及ぶあふ茶を海——とてあふ茶を海——とて  
——とて古人徳色同日の瑞々——とて虚宴の姿はこれ  
は清くあつ情更し一毫を入るのひま——とて又と句と











家を求めて新宅ちかきしとの様子を樂しむるはこれより  
かつて徳者の貧しきより安しと人の新宅を招きよてしは年  
志きうと滑稽せしれし作の詩はこれより父のめくつるを  
と子のめくよまらるるの詩と常し教を作られしより思  
合をよむるのよきかきし求むんは父のめくつるを  
かきしより先師の言をよむるの向しとす  
てするむるし一はこれより乙州の新宅を妻に待てと有るはこれ

### 弱法師の家門の餅の札 其角

け向五元集の八市隅と記さし市中の斤住居といふ義又  
富の築きしといふ弱法師といふは謡曲外百番のうら

け向名目より思ふ出さるるやけは法師は自他の差が  
しききとて味あふし一札は乞食願より江戸町を  
不仕切札といふを張て物貫の札とぬやうし料をよて仕切  
りし札は餅の札といふ餅の仕切札はむく何の年月餅仕切  
と書之又條時の夜夜法師の角は四角を小紙に仕切て  
を押しし張の茶を餅貫の仕切は只印を押しし餅の四  
角を小紙に張てけしを餅の札といふ之弱法師の家門  
は餅の條の札といふは餅の條の札といふは餅の條の  
こて作らるるといふは餅の條の札といふは餅の條の  
ハ弱法師と名目法師の乞食とてしは餅の條の札を張  
てけしと説きしは餅の條の札といふは餅の條の



云々も居らぬと云々舞——又淫曲の弱法師と云々河内  
至高安の唐土の厨通傳といふ人の子に俊徳丸といふ子  
いなりて乞食せし——成りたる信にされとも七日目を食て  
て八日目を食て——その文句は貴族の人のけりひのまらひ  
よひ疑は波江の豆とよはふと——實に淫のよらひり  
成番子大酒の才のうら二取ての一精酒落てんるる——  
勝るひの人のとていけけと還陣の杖かといふ句を  
もちりて思ひ合ふ舞——枕持の産世ははひの豆といふと  
よわりやいりりり子を酒酔と弱法師と云々の趣向と云々  
一句のうら二取て押座成りて解るるははの節よりいり市中  
寓居所も眼交の場ゆく酒落のうら二句成るすと云々

紫本の枕やるる祖父成りけふ子枕 長和

紫本の枕やるる祖父成りけふ子枕 長和  
紫本の枕やるる祖父成りけふ子枕 長和  
言外に云々うら二取祖父のおちちと云々舞——句意は大晦日の  
の混雑を法衣の四匹とも同情なりさるるをくの取終り  
扱の文ととも徳居のうら二思ひ合ふはあやくと云々  
媽と居るはめも思ひ出りてめ何おひすやら舞と書女又ハ  
下女も尋ねるは何用なり——お老翁お家来と云々よ  
火燈おとさし入なり子枕——おちちと云々  
おちちと云々風刺せしすちと書あする掬採と云々外のと時  
思ひやるる枕と云々——おちちと云々百世の極















に破き袴をきくくと男もあつては出来ざる形容の云葉  
と知る趣——又袴一ツ二ツといふ或一條二條といふも  
ある子ぬが替くむと寺の末とハ古袴の數幾もぢ  
となく出来たりといふ意ありとるハ文字の上乃解  
て姿情と

袴着るはしし巻之二終

袴着るはしし巻之三

夏

有明の面おこすやほくさく 其角

け向背子と序文よけたの面おこすは面を射あれや  
たるより又け一吹取集れ巻歌よさくらまはしと思は  
面おこすは序文よさくらまはしとて面月たるは面伏  
とふ小射しと語を知る趣——有明の月と詠や  
挿嬭面射すとてほくさくの母と詠はるも物とて  
向とるの母とて詠はるも物とて詠はるも物とて詠  
はるも物とて詠はるも物とて詠はるも物とて詠







もきし、詩も存ありといふるもこれにたは人の多く  
居るを思ひて、その閑寂殊るは言ふべき事なり

ほろろに何もなき、那う、門、梅、元兆

何ともなく、那の門、梅、野寺とて、さう、皆、寺と門、前、  
文、か、林とま、け、門、梅、へ、寺の、あ、ま、時、を、さ、  
て、ま、の、り、染、と、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、

ひる、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
智月

気操、嫌、の、白、心、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
杜、躬、の、性、急、心、これ

と、さ、さ、杜、躬、も、已、う、方、は、緩、急、を、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
月、心、意、も、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、  
小、郵、も、何、の、春、夏、に、一、つ、茶、を、を、發、音、す、時、に、れ、人、も、  
そ、の、急、も、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、  
穩、も、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
叶、操、嫌、の、中、は、何、も、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、  
考、つ、る、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、  
急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、急、







加つて悔悟おすも舟中の危小時々のかけ合せと  
餘意おす無し

心ある代有殿やほろろきん 去来

是亦擇婿の自心必主地政の代有聚斂おつた  
アとちやろく己に奢侈を極て配下成ちやまらけり杖  
おのき獨り物知り形小馬小やふかきと誰おつまけり  
とくも支配おを煩えさるるさ母時を女室お時度  
けろとくいさうさるを擇婿お合せて時を小風流  
の多色をえりて心ある代有殿の風情を識り風  
諭の句もはるる無き也

心死ら 秋塚てあけわくさし 遊女 奥品

遊女奥品とて下し、貞事の以新吉原お名にさうの  
ま女よりて風流の及も殊うさうしとまんさまは志  
成家て和歌集の例よなうして入集をえりとのとさうり  
又風流の小舞し花街小晋子うん人数集らうて白晋子  
とて上方へさうさるや時を成結儀々意忍ふの切なる句は  
て句意を以ておすめさるる成すは南布しと男は小なれハ  
りし無死をせめてあつたは塚とあつたもあつて時をさ  
せよとつとさうりし無死をたあ塚とあつたもあつて時をさ  
るるくはあつたおとさうりし塚とあつたもあつて時をさ



古き歌の句なるは死と一格をよみてききしる也又  
その方々々々の中へも志の情深きとやせしむる也又  
送筆を乞ふ今時娼婦の舞ひあはれぬおきん草子歌  
と生り

松島一見の時子歌とや松の

毛衣しよりり松と

松を山や松ふ才とくれちしん 曾良

桑羽行脚の時松島一見は祐盛法師の子多かるやたの  
毛衣しよの歌を思ひ生りしれをとりし詞出之句意もか  
らあるも神々の入江ふみぬかすてふ多かるや松の毛衣と

とある歌を一掃して子年乃緑松子子多の壽賀を掛合  
せし時子の句作手扱といふ也一松を山やのやれ詠めの子  
して松ふ才とくれの時多下おせし由も多かる松ふ才  
を借して松ふれといふ意之松の字認めしや松島改動は  
句の表は下り候てしその表はるる心小松島の風  
景を賞美する何ゆり小歌いかに松島の壽賀を借て長  
く此松島歌を詠也といふ意心と念も趣し時多かる  
かりよ松と借しし心こすまはた小松島揚州小遊ハ  
んと云らん唐土人の意も通ふ魚も丸祐盛法師歌ハ  
寸法もばいしとぞよきまなりれしとるる句ハとて痛し



しんせふ成らんしんせふかんじちる 芭蕉

けふはふしんしんせふとけんこもよ下知の句ありて隠念の  
最上祖翁の発質言外よりわけて字より沈思して味は  
祖翁の深意と探り得る。初心の俳士は違ひたる句を  
いよく心と止てあふる。祖翁の嵯峨日記に曰世二日乾のつる  
雨降る今日人もなく淋しきあふむむ書して探ふそとまふ  
西上人のよき侍る山里小こらあふ侍をよふこもむらり  
任んとおひひしんせふ成らんしんせふとけんこもよ下知の句ありて隠念の  
士の曰客ら昨日の雨を得れは主は昨日の雨を失ふまふ空け  
るまふは小憐れまふ又しんせふ成らんしんせふとけんこもよ下知の句ありて隠念の

とはある事小指居てまひ句心とけりきよまひ句意解し  
得る。又侍やら歌小指居てまひ句心とけりきよまひ句意解し  
か。捨しんせふ成らんしんせふとけんこもよ下知の句ありて隠念の  
たの意を味ふしんせふ祖翁の吟了然しんせふ成らんしんせふとけんこもよ下知の句ありて隠念の  
任する家まふしんせふ祖翁の吟了然しんせふ成らんしんせふとけんこもよ下知の句ありて隠念の  
世の人の淋しんせふかんじちる乃てきてあふ侍を淋しんせふ成らんしんせふとけんこもよ下知の句ありて隠念の  
しんせふ成らんしんせふとけんこもよ下知の句ありて隠念の  
今古一人の魚しんせふ成らんしんせふとけんこもよ下知の句ありて隠念の  
いと蕉翁のよきとぞくしんせふ成らんしんせふとけんこもよ下知の句ありて隠念の  
てあふかんじちる中よ懸るしんせふ成らんしんせふとけんこもよ下知の句ありて隠念の



行の何れや野の鄙言は俳諧のそめを何れか  
とけたる志はる人々も深く祖翁の心意を揮いで邪  
路横道は落へるなりを只こゝろのふく多識流みせり

旅館庭を南く庭柳と見す

若柳茶いりみ成也一はうり  
膳 曲水

なをまよふよりして、柳とみまをよすはうりす、色みち  
まをちりしとをりしを、心まをよと実情よ、うて詞を  
まをよる心、舟の舟木地まよる、一柳一本の美柳と見  
すの記、志まよる、句まよる、まを柳の心、まよる、目まよる

柳の葉ももも、かまてひぐく、まをよる、呂耐軒の詩句  
は回頭、往事如、楓葉、入眼、高人似、菊花、と作り、まを  
柳の心、まよる、世事の飄零、して清介、まよる、殊に  
す、まをよる、感して作り、曲水、心まよる、れらの意、何  
まをよる、まよる、と著、といふ、五文字、想ひ、して、若冠、黄老、を  
言、又、張、錯、の、意、まよる、何れ、まよる、取、て、天地、若、萬物  
之、逆、旅、光、陰、者、百、代、之、過、客、といふ、心、まよる、又



此間六祖翁の作りと云ふ事一あやと思ふをて嵯峨日記  
子乙州の武江より傳り信ると云 朋存門人の消息ともある  
所々中世水は快く予の位控へて芭蕉の旧蹟をよめて  
宗波の邊より一むら一詩小鍋洗ひ一はまらぬさう曲の  
又方ふささし西行杖二巻こころまやうと楓を本外は青き  
色をこころとてけ句と出せりすは江戸本多庵の蒲巻  
在宅乃趣とてさへうけ美楓の青きも茶色も清きさとの  
一筆ありとてつ子重なる美楓のうす下ふもの字とて茶色  
なるものも好字と去てまのこころを如て思ふ事一  
と青の葉もさへ黄くと壯老の拭合は極められたり一物  
再之吟集して味ふ事とて楓の字なるも多後編に奉り

四月八日 詣 慈母墓

花水ふるん ころころ 茂りう那 其角

花水ふるんは清浄佛を持たしむるをふふして殿 正行  
式に公より根源ふさへくころころ小松とみ辨をさへけ五  
香水をくく佛お浴くく 花水をなすく 紫雲日記より  
ころころささきハ花水とてさきみとよらつて花水と清  
仙を持たしむるさきとてさきみとよらつて花水と清  
くや新をわけてその顔もさきと親恵の句よりて花水今  
とみふくころころ 花水とてさきみとよらつて花水と清  
乃母よりころころ人よりみとてさきみとよらつて花水と清







尺ちりて驚きぐはされも智恵深き人申す尺せしと  
作りし心云外の意つけしむむのりちみ成りし心

公解り付せられたまふありし心

似合しきけしの一ちまや頂の里 七人 杜國

杜国牙まうしる後の撰ちまは亡人をもしる後の小  
文をきれし一財のりちま九元禄三年まや一名を庚午紀  
行も云ん三河必保美しふ心の人申す庚午行跡は翁の叙  
夕のたすけとありて亭子の如く事まうれとつらうま  
る采丸と名乗てその志も世し人の句意を平家頂の  
の内書表お思ひ出られてたまふありし古戦場は懐舊の  
似合しきけしの一ちまは亡人をもしる後の小

ま今けし一の盛な笑しるもさるるさるるのそれ似合  
しる有為精進の世の中やと記述しる句の突も頂の  
の里お初く舞うし頂の里のまつしりしと淋し  
けし一のむの笑しりしと淋しとある掛合を言外お味お舞  
しる一ちまは亡人をもしる意味たつらうま

主月くささ白もやうしけしむむ 嵐蘭

序文お晋子とあるゆふ家のおまをわたりて百家子化  
るまは一二の句潤しと解し得るる翁しけ句お  
すしと傳しとて説きおわたり青臭さ白心のむむ



と白ひとやうく作りこれにて面をさるる能世は  
ま身臭きく萬物皆土に解するの白ひはこれにうま  
白ひといふが如くそのさうなくを去る如くやうく  
よしよらば火を消しし時をその白ひはつるのえを  
思ひあてけしむと清くし訓の同じき縁をとり又  
白ひをせし白鼻の縁とある西蔵と夢題を

井のす急ふばく清く杜美 半残

井の流しは末の浅くと流しはまみみは杜美と  
その作はしと新かけし子ふまふし此子ま  
原も見る如く杜美の字義は多識編小舉

起く物ふすはぬ朝の雪は  
起く心うこはかりつらん 仙花

杜美を目覚ますはこころは情余のこころの雪は  
かきつるを賞するは情心かきつるは心魂とす  
たり詞をよよく思ひ合はし味あり

題去来と嵯峨落柿舎二句

豆種る畑も木角屋も名取の丸 凡兆

落柿舎といふ去来と別荘の号といふを







を外の方よりけし詠くものありし心憂う。藤泊の情よ  
詩やうんとよらるるんハ折場近く極まるるあはれにあらざる  
ゆのまおしゆきまてぞつらなるよつを憂の句情はり  
て許すもやとんもむらむら一む都の園近く極まる桐の  
木をながらるる句作れりて後とまのむるまはふ藤泊の情  
をみよすつらなるの都の古意を思ひまたるよつ海に

洗滌やふぬそこの柿の花 尾張 薄芝

る晴の掃く振もてて柿の木のもよ洗滌するさかり  
こころを魂よりとむむ世のちこしとふるま毎まふよ  
〜

豊玉

竹の子や力成詩ふるよよ 元北

豊玉と豊臣秀吉公を祭る元新法方廣寺境内に在る  
吉公を竹の子ふりて千古一人なりて鄙賤より九年  
して開白大政大臣の経昇りゆふをゆふ力といふ魂也

竹の子や自由隣ふ悪 去来

大郎次郎ハ男子の通称より悪たふよよのつらあ  
るると仇名ハ称しよとと嗟嘆の意極余の竹林乃  
筆を盗まれ一紙作りよ名悪たふの悪の字魂は



























つはまうとす

奥羽高館にて

算子や兵たり也先乃依芭蕉

付向奥羽紀行の由ありて奥羽高館と九段義経筆居の城地あり今と田畑とすなりて義経子孫も英勇乃名士我死の詠ありて高く筑て小松を種とすんとの英勇俊傑の名士家と一睡の夢と消失する者の詠とおもひる幻術の五文字とて呼ぶなり

這い出さうと公や下の蟻のあり芭蕉

奥羽行脚の時羽尾花伏とす下の俳士は風を待た還留せられしもの詠ありて万葉集の歌あり公やう下よあり陸ありとよすなりと公やと公やと公やと公やと公やとされど公やの詠後成建家おん麻火屋政大とす顯照法師の蝨洞ありす清輔と魚とする公やの屋とすなりと公やとす今俳士けと義と述べて顯照を難陳小田口せし麻火屋の説を取るもの多し本説はたも何とぞとす是を和歌のりありと想ふを孝吟所小入て孝とせしるあるは万葉集の公やのりありとすなりと公やとす眼う説非ありとすなりと独古語首といわれ一人あり



今更なる説を著して他書より引いて一考をせんよめを既  
 子後風う宅きて涼しき事を家指ししてあることとが  
 証を伴ふか又次ハ方言言ハふかひこかやとらひや  
 と他一とあるかの言ふよつて然も蛙の格を脱して蟻  
 がくるとある一とあるは是かして顯昭う内口ハ性ある也又田  
 苑水沢を住といふて蟻室の下ハと疑うられしと云  
 毎々蟻室より一人女の下に住むのを取らして蟻室の下  
 のより女を引られしを女指といふ也一但し初層蟻室の  
 他はとも未熟の他士女説ハ惑ふもことといふは蟻と春香  
 とを伴ふのちれども三月午の日かきどめ一桑ハ身て四月夕  
 夕もを引対する翁の遠處に暮らされし蘭をいともかひ  
 なること一層を引いとも多く蟻を養ふ所をわも蟻  
 が宅の蟻室昂昂の向こよめかひこ個々婦人のいれが  
 小よそつてこそ世の鈍蟻も言出よけさ語あふどりこと  
 写ハ再が物のる情ヲ通せぬことといふも小して底意  
 ハ翁より方小解ハ心なく遠處する或余とる向こよめ  
 又蟻小引蟻の縁成用ひられしと云つ彼と云ふも  
 麻火屋敷火をユてら向意解一が一一又言ハらる向こ  
 蟻飼はる人も古代の姿を舟と作りしはけ付のつたれハ  
 それらも考合を騷閑部部の掛合せし深く味し趣  
 け境をいひしるかきしるはのこめ

け境をいひしるかきしるはのこめ











かゝこの名無家の神社へまゝとていふる士のそのまゝと  
證義よりして行かゞしとるは山坂登坂のりといふれ  
彼もさく細い舟子行かゞて思ふを果さる意とてハ有  
二のち後也といふおまづいふ凡雅木節史邦の三人  
皆旅情よりして詞をまゝとて味あふ

奥品名取の都小入て中お突方お塚  
いづゝあやと尋後付れと道より一里半  
とらふたの方益高といふおまづとお  
あゝといふは五月二日といふなりな  
おるるよ

益高也やいつこり月おぬり道 芭蕉

奥州行御の附の白之中將實方ハ一条左大臣師尹公の孫待從実  
時の子ハ右中お正四位下陸奥守お任ハ長徳四年十一月任國  
おして卒すこれを行成と殿上おて口傳のりおつて行成乃  
冠を菊おてお殿おれハ返ま上ひそふ御後せらるるは家よりと  
お初れそまの世とも陸奥守おありつたおれつおまの世も  
とせられといふお方の家ハ西行上人のくともせぬと名をうり  
成とせまをこれのりといふとていふとていふとていふとて  
おのりといふ今おかゞの世といふとていふとていふとていふ  
ちくといふハ家といふとていふとていふとていふとていふ



うらまきとりの義こりあくと六無別と出て有りたる中  
なごりふ同しなれば家ハを別とりの義ハ一と見付  
るや打るるといふ意也名義中をいふ人並也とい  
ふや月日のぬり及きて見るにむとつ子ゆ中義ふま  
ふりもこのいふ世のたふみするといふこと何の  
ハハ橋といふ意味も通し也又一家のよりあふ  
いづるまごの言もいふ中

大和紀伊のまういとてなす一板よて付  
礼をとくぬり加さるる科  
紙のとく一書つけ

つらもとてなす一板よ月日 去来

とてなす一板名無上り科代足ハ神錢論  
たる字母一俗言は同一といふ同しつら  
あふといふ信信之板のつら  
あふといふ字ハあやうい念て  
あふ一板あふの句あれい時  
板のい毎言外はす

板次別や一おみ金情つ月日 凡兆

金情ハさびと読ぬ一字彙ハ精ハ精也といふ精情の



誤字にけ時代の通用字とて貞徳紅梅子白可頼  
句よた力のちよごみけく金精はくとし白をてサビ  
と仮名を付り五月雨ハ微雨と云りものハ微カシを生きたる  
ハよる白水ハ腐れやきし一れらと心合言又現カシは  
利も錯をせきし時を至ハ一おし清て六眼をみしと  
す目の微雨ハよとゆふと句

日の道ヤ葵アヲ傾くさ月ツキあえ 芭蕉

家よカシの葵ハ和名ひまわり又からあふいとりふとの漢名  
向日葵一名大菊もあ漢土より葵とのこりふよめをけい  
まりののりやして葵能アヲ衛其足アヲといふ是ハ和名の何ゆい

西アヲ獲アヲといふ葵アヲはひまりの花日に向ひてその足を何ゆい  
かこると云意より名付るは實茂のふと葵ふよハ野  
いさくあふとりゆいの名なりて葵のまを月おれ大葵  
にもあふべけ白のりゆい混むるべ句意をち身  
の傳つてきたる日葵もさくべいづる日葵アヲハ一か  
大彼の何ゆいをさくや日葵もさくべいづる日葵ハ向いて  
終日あふべ人を葵もさくべいづる日葵ハ傾くと  
いふ字魂やして毎月日のさくべいづる日葵ハ又日のさ  
やの五文字の勝人のさくべいづる日葵ハ向日の足を  
いさく天地自然の道理やして一切の生を得るもの有情  
非情も本あふべいづる日葵のさくべいづる日葵ハ







こころくちまへて予にいつのまに句をけり  
先醫者のまへに時をたふさふまにけり  
あはれりこれと念おもひのまにけり  
十三年すれある年ありとていつか  
さしつゝまにけり

六人七力たしやあ母あ先 其角

みまをりて六死せりまよかりて六存せの時  
んまをりて六道ありまよかりて六存せの時  
年六人間七十古来稀といふ句ありて七十を古  
稀ともえん句又権嬭おして力たしといふ句とれ

て六人ハもの老醫ふれまよつて駕をかこりてあはれ  
んまをりて六死せり心路可くして老醫のみまをり  
まより権嬭情思ひなまより老醫ハ村田忠菴まよ

百姓もあまぬれつく 美茶摘り 去来

けい人く已く産業をてめて怠りてを底意ふ念  
茶おののそりて唄ひつれて茶の芽つむに百姓も  
茶の穂乃何くらとて刈入る時あまぬれつく  
ハまかるといふ歌なつくと俗法すまもふせり句  
又茶摘るにちまも思ひやられて茶摘るより茶摘  
のうらりもあまぬれつくといふ句とて中あまぬれつく



高上り侍りしつゆあるまゝ

ふしきや茶山一小川まゆら 正秀

近江滋賀樂の里名いへるもなぐ一言下句他で  
さうもまきまゆらの對乃答對のふ枝俗衣と一言外ふく  
てふまきまゆら小川解作有てせうしと念ひたり茶山  
一ふりふ俗話やうそ地の言を

つみ合ふ子たのしむや春白田 游力

去来抄に凡兆云けま島麻切やふまへ去来曰春  
麻切ありても蓬切ありても苦しと云へる論を

又ふまのぬれぬの痛かかき一やうと制一ゆめたる人  
まよと云ふ今拙もまま麻切ありても蓬切ありても  
と云へる論を又まの痛かかき一やうと制一ゆめたる人  
よと書ふ他の解釈上まと待て痛きと云へる論一ゆめ  
眼赤しして解作あり凡兆ゆめまの痛かかき一やうと  
の疑之疑々日記に凡兆ゆめまの痛かかき一やうと  
まま途中のゆめと語りしと云へる記されしと云へる  
の時子たのしむまの痛かかき一やうと云へる論を  
清中ゆめまの子の位生まかりこけつまらびのゆめ  
まの痛かかき一やうと云へる論を



弟より尺牒しる。眼前実より十二の童子六才一  
たり。夫よりいふ字。魂よりて。喜田といふ。麻子  
とて。その姉れぬ。こすして。麻田といふ。風流女を。一。梅娘の  
まよふ。味も。遊。一。嘆。味。日記。去。半。抄。の。ま。ま。去。来。の。向。け。  
集。ゆ。游。力。と。出。る。ハ。あ。づ。ま。一。ま。ま。ゆ。一。夫。と。い。ふ。字。魂。と  
見。バ。麻。子。と。あ。ぬ。ぬ。え。と。い。ふ。夫。と。高。き。都。理。屋。ふ。か。り。佛。士。梅  
娘。と。知。り。い。ま。る。事。論。小。及。よ。と。の。程。ま。位。の。ら。た。れ。ハ。ま。一  
程。一。論。ま。る。も。自。得。ま。る。一。あ。ま。あ。ま。あ。ぬ。ぬ。の。端。と。割。裂。ま。る。

孫を愛して

おなせふの家してやうん 句 性 智月

孫を愛してとていふ。新出は。おなせふの家。情。ハ。ま。ま。一。ま。ま。あ。ま。あ。ぬ。ぬ。の。端。と。割。裂。ま。る。  
の。り。や。あ。ま。あ。ぬ。ぬ。の。端。と。割。裂。ま。る。一。ま。ま。あ。ま。あ。ぬ。ぬ。の。端。と。割。裂。ま。る。  
尼。の。ま。ま。あ。ま。あ。ぬ。ぬ。の。端。と。割。裂。ま。る。一。ま。ま。あ。ま。あ。ぬ。ぬ。の。端。と。割。裂。ま。る。  
あ。一。て。梅。か。ま。る。と。い。ふ。之。縁。青。色。ふ。一。て。ち。い。さ。さ。性。之。

おなせふの家して性と性ふ山家う礼 花 紅

山家を喜作とて。一。ま。ま。あ。ま。あ。ぬ。ぬ。の。端。と。割。裂。ま。る。一。ま。ま。あ。ま。あ。ぬ。ぬ。の。端。と。割。裂。ま。る。  
又。鯉。近。七。嘴。あ。ま。あ。ぬ。ぬ。の。端。と。割。裂。ま。る。一。ま。ま。あ。ま。あ。ぬ。ぬ。の。端。と。割。裂。ま。る。  
ま。ま。あ。ま。あ。ぬ。ぬ。の。端。と。割。裂。ま。る。一。ま。ま。あ。ま。あ。ぬ。ぬ。の。端。と。割。裂。ま。る。

よしの川の関とて



風流のまゝめやう大田植うゝ 芭蕉

風流といふ風流を同一するのやうな書はゆたかき一書に  
あり風にかざり風の一般に比喩する如きは之を風流女  
といふ姿のなるといふ本諸物の如き動きて姿とあるは  
風俗といふ一般の如く流る如く上より下とて姿形も心情  
も同じ物も一樣なるを云ふては俗をあらわしと訓は  
よきもなり一書もその風を馴れずといふ義に拙家の風流  
といふは流の昔の如く傳はる残りたるを云ふ水の流る  
傳はる如く昔の風流が残り傳はるて居ると云意を流儀  
など云流の字義も同一風流といふの正しきを云ふ

祖師の風流の如く化るる底を華に失して夷小  
りもむといふ如く華の金地に古くも残り華の奥  
羽の大國都へ遠くして返り古く古雅質素の風俗  
に残り傳はりて鎮守府以来の傳はる田舎合せらるる  
多かる華一書は田植唄の唱へる古くもだにあり  
上て唄ふと云羽行脚の風流足踏の如きと云意は  
此の如く一書や大田植といふんといふは昔生佛と云  
と云意は或説く桑の田植といふ昔生佛と云意は  
化りて人なきといふ又新樂能の如き風流といふ  
この十八番あるも同じ和言に田植といふの別  
けをいふは風流のけをいふの別けをいふ



まゝ一おてよ代々〜いづく〜御いすの娘はけみ  
の〜白極〜より起りて〜いすむさ〜よあら〜く内助  
吉原あるを〜賞する心や一句のふすも能くは相言  
の〜いすのより生るを翁の句に添きよあるをかくして御  
覽するや〜小句伝るるや妙〜い〜い〜い〜い〜い  
す説く生佛も能くま〜くを捨て〜い〜い〜い〜い〜い  
一句のふすま風物の氣質思ひや〜い〜い〜い〜い〜い  
好蓋〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
却りて子弱くあると〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
以て考要とあるを〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

出羽のされ上とるる

眉掃と面影み〜く〜み影のそ

出羽最上も紅花の名産之因て此向より眉掃とよまの  
ハ化粧乃鼻の〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く  
ハ台毛の心や〜筆の如く〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
ハ薊の花乃如く〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
の眉を〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
のいけ合を〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い



法隆寺開帳南無仏の太子を拜ら

序 禱めくつをふけく 子影の花 千那

大和法隆寺南無佛の太子ハ聖徳太子ニ奉の御像ニ  
して内禱成めをまゐるつう 子影のむと化ちる殊勝  
におかよきのふに三ノ外おつるあう

田の畝に豆つるいり 螢う那 伊賀 万乎

去来お云け句初六先師の斧ノキ平り 九兆句句之様慕  
標の附九兆云け句る処を 除く句 去来云成り 雲成  
つるいり 螢の光割秋の気色風姿ありと元施不許キカ

先師云推り 持くまお拾はん幸い伊賀の句お似るつる  
とをを重し 乞う句とまへん 孫ツク万乎う句と成り  
去来されく 雲成眼紫の氣色物言おふまよ 海風  
つるいり 但九兆ハ田のつるいり 雲成かた歌と成り  
たり

膳所曲水之橋かへ

堂火やいといはちをて 鶯のやう 去来

膳所の曲水橋上かへるの吟うり 夏の日くま 海風をほり  
をどり 雲飛ふ 湖水の軋々を氣色言外おふまよ 鶯の  
されつるいり 雲成情備りて 魂生年よりす 風も余



程つよまのこゝろをなほしつゝの海をぬきの湖ありと云ふ  
鳴のやうと作りて海とみよと心は持てるものなり

勢田の螢見二句

螢の光や子た泣き出さる螢みゆ 九兆

は句実情の場あり三四の幼きものや連て螢見み出  
しつゝ子小衆て薄きよと驚て泣き出さる螢みゆの  
実情ありと曾た泣き出さる螢見み出して連て  
本よりし今も泣き出さる螢見み出さる螢見み出  
見きつゝの秋しつゝを思ふよとみゆとみゆとみゆと  
仁和寺の僧徒の足鼎あり又を思ふ興ありとみゆとみゆと興

は句実情の場あり三四の幼きものや連て螢見み出  
しつゝ子小衆て薄きよと驚て泣き出さる螢みゆの  
実情ありと曾た泣き出さる螢見み出して連て  
本よりし今も泣き出さる螢見み出さる螢見み出  
見きつゝの秋しつゝを思ふよとみゆとみゆとみゆと  
仁和寺の僧徒の足鼎あり又を思ふ興ありとみゆとみゆと興

ほつゝのや船頭 碎しおぼつれ 芭蕉

是又実情の化ありし句は船頭といふは句は舟小衆と  
は舟小衆とて碎しとて字裡ありとて思ふをいふは舟小衆と  
云ふは句は曲り場ありとて思ふをいふは舟小衆と  
いふは句は同し言ふは舟小衆とて思ふをいふは舟小衆と  
程つよまのこゝろをなほしつゝの海をぬきの湖ありと云ふ  
鳴のやうと作りて海とみよと心は持てるものなり

三態心望し消るる所



管ふらやうおらるしん鬼尾谷

長崎 田上尼

ハ鬼尾谷と無舟山中と鬼尾谷と鬼尾谷の  
字ハ尾の走るものと掛合を言ひまゝと鬼尾谷と  
おまゝと字の走ると字のまゝとおまゝと  
たあこのまゝとまゝと掛く思ふんとまゝと  
おまゝと掛く思ふとまゝと

あまうあふ稽くせうらとぬらぬら 尚白

あまうあふ稽くせうらとぬらぬら  
あまうあふ稽くせうらとぬらぬら  
あまうあふ稽くせうらとぬらぬら

あまうあふ稽くせうらとぬらぬら  
あまうあふ稽くせうらとぬらぬら  
あまうあふ稽くせうらとぬらぬら

草むらや百合の中しん鬼の白 半残

草むらや百合の中しん鬼の白  
草むらや百合の中しん鬼の白  
草むらや百合の中しん鬼の白



百合の花をうらむは「愛」をうらむに思はれては「夫」をうらむは「目」を  
うらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」を  
うらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」を

病後

空つらやかからあつて百合の花 何処大坂

空つら上カミのしるしをうらむは「病後」の上とするは百合の花  
の香がうらむは「夫」をうらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」を  
うらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」を  
うらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」を

空つらやかからあつて百合の花 乙女

先よりの心で思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」を  
うらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」を  
うらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」を  
うらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」を

焼政詩を化して

子やあうんこをうらむは「夫」をうらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」を

焼政の詩を化しては「夫」をうらむに思はれては「夫」をうらむに思はれては「夫」を



中の流乳一丁坂の宿中を去るに母もた小眠りありて  
作れりて夫もあまき東山上臣懐良う歌みおくらり等々今  
まゝしん子まゝらんまゝ子乃母もあまをりつらんしん  
うりて作れりてつ見辞の文も風俗文違ひあり

餞別

まゝおやや好屋もつらぬ縁の世 華所 里東

まゝおやハ縁のやうに改ちまゝぬやハ縁のやうに縁の世  
まゝおや好屋もつらぬ縁の世まゝおや好屋もつらぬ縁の世  
の縁縁の世まゝおや好屋もつらぬ縁の世まゝおや好屋もつらぬ縁の世  
の縁別ちまゝおや好屋もつらぬ縁の世まゝおや好屋もつらぬ縁の世

て送るに別りしおや好屋もつらぬ縁の世まゝおや好屋もつらぬ縁の世  
又家まゝおや好屋もつらぬ縁の世まゝおや好屋もつらぬ縁の世  
縁縁の世まゝおや好屋もつらぬ縁の世まゝおや好屋もつらぬ縁の世  
心らうげまゝおや好屋もつらぬ縁の世まゝおや好屋もつらぬ縁の世  
因て只その縁中のつらぬ縁の世まゝおや好屋もつらぬ縁の世  
世々の深意をまゝおや好屋もつらぬ縁の世

うとく成人おつれて

まゝおや好屋もつらぬ縁の世

みしう歌を吉次ら冠者よ若狭也 其角

うとくある人との俗語の金根殿室よ富て何ひとら



ふ豆のまふ人成云之徳切のつらふといふまらうら  
有徳とかくく条まふらふは侍勢太神宮へ福ま  
るをいふ之従者ズカの家僕の通称之つれつらつまらふ云  
るまらふは主人の徳ふつれはらふらふと云意之吉次三  
条子大福者有りて名を橋元信高と云毎年奥州へ下  
金商人之後小美徑に仕へ武士と成て姓名を堀彌吉景光  
と下へ給ひて母二の郎堂之武家評林又俗傳云うとくまらふ人  
を金賣吉次と稱して従者ズカと稱しと他りとも之周禮に男  
子二十以上を冠すといふ九条以上の稱さまると本邦の制と女  
子二十以上を冠者クシヤと正音セイオンに稱する時と此曹子之成長の稱  
と之クシヤと冠者クシヤと畧稱する時と此年の従者ズカと云と云と云と云  
能程のまふ郎冠者まらふ云まらふ稱之面白意は今や  
し名給を惜して酒汲かきんと田子小短杖のまらふもまら  
名給惜しといふまらふまらふ冠者ズカとまらふといふ一將の酒  
とまらふといふまらふまらふ面白意のまらふとまらふ冠者ズカは恨  
加らり祖宗の流初ありて入るまらふといふまらふ面白意  
恨がらりといふまらふまらふ面白意のまらふとまらふ冠者ズカは  
まらふといふまらふまらふ面白意のまらふとまらふ冠者ズカは

隙明や登の生てけ身り穴 文料

冥情の句あり登のまらふ面白意の  
這入格うまの危がり思ひやられて言外おすらう隙







虚と低りしつゝはまらき實作の言外中なる所又由るし予今  
より北条子とても前の姿奥は姿の風曲れる枝はひぬえと  
いふ句を低りて先師の斧正をもとめしはかたあまをけし  
やすきき因て入し中も尺もいふはる面をいしりてまらき  
さきハ自らも生年とて思ひぬえをまらきの真徳と俳諧  
の号以續くしつゝは俳士に尺もいふはるのさし曲<sup>キヨク</sup>の枝を  
探ふがごとくは句の妙凡のわがやまらきハ世に枝とみ  
ていふと由る心より生るもまらきのぬえとていふは是れ  
よるしつゝはひぬえをいして疑の掛ありしを句にまらき  
と云ふうすれハ疑の針を用いしつゝは云々して外ハ修徳  
まらきとていふは世に探ふがごとくはまらきとていふは

まらきを實ハ探ふがごとくは句の妙凡のわがやまらきハ世に枝とみ  
ていふと由る心より生るもまらきのぬえとていふは是れ  
よるしつゝはひぬえをいして疑の掛ありしを句にまらき  
と云ふうすれハ疑の針を用いしつゝは云々して外ハ修徳  
まらきとていふは世に探ふがごとくはまらきとていふは

客ありや兵をよかひる 探志

客ありや兵をよかひる 探志  
は若ぶつゝは客振舞とていふは探志  
は若ぶつゝは客振舞とていふは探志



多擧り舞ひをりてをまて客をりてをまてをりてをまて  
客のゆりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
つれづれが客のまりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
つれづれが客のまりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて

死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
芭蕉

死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて

死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
死に死ぬりてをりてをまてをりてをまてをりてをまて

七目麻刈りてをりてをまてをりてをまてをりてをまて  
槐市  
此句社翁の掬みちをりてをまてをりてをまてをりてをまて















日の園やこくれて暑き牛乳舌 正秀

日の園や山城を治郡と京と大津の百一里塚の西の節  
こくれては意こがまるなごりよこねふ同くあつたの略語  
こくくこの音通す何の字か去つこねを計りもきあつた  
物言ひこくねる俗語のこくねは説く多し略を家あ  
品何つよふくく暑して心ちうぬも暑くこあつたを  
牛ハ暑よふく暑くむりのやうにこくくして舌をこく  
あつたぬ具はつたあやうに重なる言ひは抄録田の  
る日の園と云ふ焦るとかこつたつたて交るもあつた  
園地ハ四方より山をこくして百五日の殊に風をこく

そく暑くは髪ふよれは髪なり落 又節

髪カガキのりよ髪カガキの毛の抜けはさう五五の節もこく  
髪カガキをぬるさうさう暑さで髪カガキをぬるさうさう髪カガキをぬるさう  
つらくと髪カガキの本よれは髪カガキの毛もぬると又髪カガキを  
ぬるさうさう髪カガキの毛もぬると又髪カガキをぬるさうさう  
髪カガキの毛もぬると又髪カガキをぬるさうさう髪カガキをぬるさう  
髪カガキの毛もぬると又髪カガキをぬるさうさう髪カガキをぬるさう

あねんこの暑あつた 野童

あねんこの暑あつた 野童  
あねんこの暑あつた 野童  
あねんこの暑あつた 野童



竹の一面は天然と枯る故がねんご云く伊賀竹ハ五十年は  
一々を嘆字ありて孫子枯るものしく本草ハもやうぶ  
ねんごハ自然枯と云ふなり山坂路傍ハ生む竹の  
枝葉はうららと枯るを夏曆にて日中ハもやうぶ風と云ら  
くさるやハ枯竹叢を以て生む風殊更ハつらくさるや  
云ハ一面の叢取竹亦らうららるやねんごといと暑く紅梅  
向ハ季次うららねんごの竹ぬる竹のさるごとく云うを

夕月ハよりれつと暑く日者ハ秋 羽紅

竹の一面は天然と枯る故がねんご云く伊賀竹ハ五十年は  
一々を嘆字ありて孫子枯るものしく本草ハもやうぶ  
ねんごハ自然枯と云ふなり山坂路傍ハ生む竹の  
枝葉はうららと枯るを夏曆にて日中ハもやうぶ風と云ら  
くさるやハ枯竹叢を以て生む風殊更ハつらくさるや  
云ハ一面の叢取竹亦らうららるやねんごといと暑く紅梅  
向ハ季次うららねんごの竹ぬる竹のさるごとく云うを

青竹ハ湯入なるめんあつ山 江戸 巴山

向情よくあつて一云々のをとりあつて一々を嘆字ありて孫子枯るものしく本草ハもやうぶ  
ねんごハ自然枯と云ふなり山坂路傍ハ生む竹の枝葉はうららと枯るを夏曆にて日中ハもやうぶ風と云ら  
くさるやハ枯竹叢を以て生む風殊更ハつらくさるや云ハ一面の叢取竹亦らうららるやねんごといと暑く紅梅  
向ハ季次うららねんごの竹ぬる竹のさるごとく云うを







去来抄不又

さくしーはやはらぎのしん小のひん 九兆

浅草のくアサダの字アサダ写りて讀ア一浅草の辰アサダと同之アサダ浅緑の  
茅カガヤとひみと略しーとありてあざらふ生しる茅とひみとひみ  
草の浅草も浅草アサダの字と云義みして糸と云を心小舎に  
赫ヒツカサと云ひして解をを結コメてすもし又しんアサダとひみとひみ  
法ホウめーカドと云ふ向とある寺院の門カドハヤカドはなカドの也  
新ニや又ニはなニの赫ヒツカサと云ふ月ツキの糸イトと云ふイト行ユクぬぐ  
ひつヒツたタる馬ウマと云ふウマひヒて休ユスと云ふユスひヒて休ユスと云ふユスひヒて休ユスと云ふユス

おのつぎ思ひやられて大の日後アサダひヒて休ユスと云ふユスひヒて休ユスと云ふユスひヒて休ユスと云ふユス

辰ツクシのしんアサダつゝツクシのアサダさくしーツクシのアサダ九兆 千那

手習ひテナリの困クワムトクワムと云ふクワムと云ふクワムと云ふクワムと云ふクワムと云ふクワム

月ツキ鮮アサダやツキ児コのアサダ察アサダ此アサダ為アサダ積アサダ 首良

六月七日アサダ徳アサダ園アサダ寺アサダの月ツキ待アサダの句アサダやアサダ児コハアサダ洋アサダ小アサダ家アサダの  
児コやアサダこれアサダをアサダ降アサダのアサダ児コと云ふアサダ眉アサダ墨アサダと云ふアサダ心アサダ又アサダ念アサダに  
糸イトのアサダしアサダけアサダと云ふアサダ句アサダ化アサダれアサダるアサダ糖アサダハアサダけアサダと云ふアサダ知アサダずアサダ化アサダ積アサダ  
のアサダしアサダけアサダと云ふアサダ句アサダ化アサダれアサダるアサダ糖アサダハアサダけアサダと云ふアサダ知アサダずアサダ化アサダ積アサダ



夕ぐれや元並ひる雲のまゆ 去本

元并ハ元並の并ひる形と云ふゆゑ夕ぐれやの五文字は  
夕日のまゆと云ふことなりまゆと云ふは元並と云ふは  
まゆと云ふ

夕ぐれと云ふは

雲のまゆ今のは比叡ふ似物 大坂 之道

詞の始ては夕ぐれと云ふと向きは比叡と云ふは夕ぐれと云ふは  
先づは比叡と云ふは比叡を比叡と云ふは比叡のまゆのまゆのまゆ  
の形ハ比叡の四明山獄カケふやと云ふは向かひて比叡のまゆのまゆ  
と云ふは比叡のまゆのまゆのまゆのまゆのまゆのまゆのまゆのまゆ  
と云ふは比叡のまゆのまゆのまゆのまゆのまゆのまゆのまゆのまゆ

枕詞表 卷之三



